岩手県総合計画審議会
令和２年度第３回県民の幸福感に関する分析部会

（開催日時）令和２年６月 19 日（金）13：30～17：00
（開催場所）エスポワールいわて　３階特別ホール

１　開　会
２　議　題
　（１）分野別実感の分析について
　（２）その他
３　閉　会

出席委員等
　吉野英岐部会長、若菜千穂副部会長、谷藤邦基委員、
　Tee Kian Heng（ティー・キャン・ヘーン）委員、山田佳奈委員、
　和川央岩手県立大学特任准教授
欠席委員等
　竹村祥子委員、広井良典オブザーバー

１　開　会

○北島政策企画課評価課長　若干時間早いのですけれども、お揃いですので、ただ今から第３回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。

事務局を担当しております評価課長の北島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は竹村委員、広井アドバイザーが欠席、谷藤委員が遅れて出席ということですが、運営要領第６条第２項の規定に基づき、委員の半数以上の御出席をいただいておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。なお、総括課長の照井につきましては、業務都合により遅れて出席ということです。御理解のほどよろしくお願いいたします。

議事に入ります前に資料の確認をさせていただきます。本日の資料は資料１から資料６、インデックスを張りつけていると思いますけれども、それから参考資料、政策分野の評価の考え方という参考資料をおつけしております。過不足等ありますでしょうか。

また、前回の部会で御了承いただきましたとおり、今回の部会につきましては非公開としてございます。

２　議　題

（１）分野別実感の分析について

○北島政策企画課評価課長　続いて、議事に入りたいと思います。

運営要領第４条第４項の規定により、部会の議長は部会長が務めることとされておりますので、以後の進行につきましては、吉野部会長よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　それでは、時間も来ましたので、第３回目の分析部会を始めたいと思います。予定としては 17 時までとなっておりますし、谷藤さんがお見えになるのは３時半頃と聞いております。ですので、途中で１回インターバル、休憩を取っていきたいと思います。予定としては、資料３までをまず御説明していただいて、資料３までについての質疑応答をして、それで一旦休憩を入れられればいいのかなと思っております。

それでは、お手元にある分厚い資料ですけれども、前回、前々回の討議を経て、さらに改善していただいたもので説明をお願いします。

○池田政策企画課主任主査　それでは、事務局の池田と申します。よろしくお願いいたします。

前回資料の御指示がございましたのが、１つは県民意識調査の全部の属性を見たいということを御指摘いただいていますのと、あと、補足調査の結果について、広域圏別と、年齢別とを一通り見たいということで御指示をいただいたところでございます。あと視点といたしましては、平均点が低いという視点と、あと属性別のところで大きく下がっているところがあればということで、そこの３点の考え方についても含めて御説明を簡単にさせていただきたいと思います。

資料１が属性別平均点の全ての分野、あと主観的幸福感もつけてございます。この分野の中で、上昇、下降、低下、あと平均点が低いものということをお示しさせていただいてございます。大きく下がったものという基準がなかなか設定できずに、今回有意なものをまず見ていただきながら御検討いただければと考えてございます。

緑色でつけてございますのが上昇でございます。おめくりいただくと黄色いところが出てきています。今回平均点が低い値で推移しているものという基準について、事務局のほうで検討いたしまして、調査開始時から３点、いわゆる「どちらでもない」という中間点よりも低いまま推移しているものを表示させていただいてございます。

３ページ御覧いただくと若干見づらいところもあるのですが、オレンジ色の部分ございます。このオレンジ色の部分が実感としては低下していて、平均値としては平成 28 年からずっと３点に満たないものを低値とさせていただいています。こちらは分かりにくいので、後で資料４をもって御説明をさせていただきたいと思います。

続きまして、資料２でございます。こちらについては、広域振興圏別に補足調査の結果を整理したもので、こちらについては、今のところ特段論点は見えてきていないところもございますが、こちらも後で御覧をいただければと思っております。

資料３については、年齢別でございます。年齢別のほう、御指示のとおり全部作成はしたのですが、資料上かなり膨大になるということもあって、今回後で御覧いただく資料４のところにお示ししている属性の変化のあったところを中心に整理をさせていただいてございます。ですので、ここの中におきましては年齢別の有意なところ、有意な差があるところのものとか、あとは低値で推移してきたものの属性の回答結果というものをこちらで整理させていただいているものというものでございます。

Ａ３の資料４を御覧いただければと思います。一つ一つの分析していくとなかなか見づらいということもございますので、こちらの資料で全体の状況を御覧いただきながら低下の状況ですとか、上昇の状況というものを御覧いただきたいと思ってございます。この表

におきましては、平成 31 年調査と令和２年調査の差を基本的には記載してございますし、一番上には今年調査の平均点をそれぞれ入れさせていただいてございます。主観的幸福感ですと年代別では「50 代」ですとか、世帯別構成でいきますと「ひとり暮らし」、居住年数ですと「10 年未満」、広域別では「県南広域振興圏」が上がっているというような形になってございます。属性のところの（　）に入っている数字が今年の調査のサンプル数になってございます。こちらを御覧いただくと前回御指摘のございました低値で推移しているものというのがかなりの分野で見られてございます。

「心身の健康」ですと、参考のところは割愛させていただいて、「その他世帯」ということになりますし、「余暇の充実」におきましても「30 代」、「40 代」、「50 代」、「常用雇用者」、「２世代世帯」、「その他世帯」、あとは「子供はいない」というような方々のところで平均値が低値で推移してきているという形になります。「子育て」のところにおきましても「20 代」で低値で推移してございますし「常用雇用者」ですとか、あと「ひとり暮らし」、「その他世帯」、子供はいない」というような方々の属性のところで低値で推移してきているということになります。また、「子供の教育」ということでも「20 代」で低値で推移してございますし、「子供はいない」、居住では「10 年未満」というような属性のところで低値で推移しているということになります。「仕事のやりがい」におきましては、こちら参考ということになってしまうのですけれども、あと「必要な収入や所得」、こちらは全般的に非常に低いということになってございます。結論から申し上げると会社役員、団体役員以外の全ての属性のところで低い値で推移していたということになります。

ですので、今回資料６でこれらの内容を踏まえたレポート案というのを事務局で用意させていただいてございますけれども、こういった部分も理由に、分析に整理をさせていただきたいなというふうに思ってございます。

○吉野英岐部会長　前回、前々回の委員会の御指摘で、新しい資料を幾つか作って、最終的にそれを取りまとめて見やすくしたのが資料４ということですね。そして、資料の中には補足調査の資料も入っていて、資料４は、これは全体の県民意識調査ですね。

○池田政策企画課主任主査　はい、そうです。こちら県民意識調査の結果ということになります。

○吉野英岐部会長　資料２や３は補足調査。

○池田政策企画課主任主査　そうです。

○吉野英岐部会長　１は県民意識調査と、２つの調査を使っていますけれども、全体的にはこの県民意識調査、5,000 人調査を基準として考えていくとやっているのが前回同様ということです。

それで、幾つか今お話がありましたけれども、まず今の話を聞いて、あと見た感じで御質問があれば受け付けたいと思います。

ティー先生ないですか、あるいは気づいた点があれば。事前に説明があった委員の人も

いるので、ある程度は御説明があったと思いますが、若菜さんは初見ですね。

○若菜千穂副部会長　初見ですみません。資料４は大変すばらしいな。ごめんなさい、低値で推移というのは何か水準があるのでしたっけ、低値の水準というのは。

○池田政策企画課主任主査　低値の基準がないので、平成 28 年から県民意識調査で分野別実感を取っていますので、そちらで平均点の推移を確認してございます。

○若菜千穂副部会長　平均点より低いもの。

○池田政策企画課主任主査　資料１の２ページ御覧いただくと黄色いライン引いてございます。こちらを御覧いただくとこの 28 年から調査を始めて、今年まで３点に届いていないものという形で今回は我々では整理をさせていただいています。

○若菜千穂副部会長　３より低いもの。

○池田政策企画課主任主査　はい、３より低いまま推移してきているのを今回は我々では低値としてはいかがでしょうかということで検討させていただいたものでございます。

○若菜千穂副部会長　大変よいと思います。私は分かりやすいし、余暇というのは人それぞれで難しいなと、すばらしいなと。

○吉野英岐部会長　各分野の平均値、それとそれの各分野のクロスで輪切りしたときに各クロスの項目で特徴的な動きがあるところについては色づけをして、意味も少し書いてある、数値も入れてある。これ１枚見れば大体平成 31 年と令和２年の調査の状況が一覧で見ることができるというようなつくりになっているのではないかなと思います。

あと各クロスでも参考値といって、要するに値の少ないところですね、男女でその他とか、年代で若い人や職業の 60 歳未満の無職等々は、数字は入っていますけれども、サンプルが小さいので、あくまでも参考値として掲げてあるというような見方をしてもらえればいいのではないかなと思います。

各クロスの中で、カテゴリーごとでてんでんばらばらな動きをしているというものはあまりなくて、全体に上がるか下がるかというのが多かったのかなというふうに見えます。年齢的に見ても、例えば「心身の健康」なんかは真ん中辺の年齢でずつですけれども、上昇が見られると、いずれの年代においてもですね。余暇の充実は低値で推移しているものが結構あるのですけれども、若干下降しているのもあると。

低下と上昇が一遍にあるというのはあまりないのですよね、同じ形の中で。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、属性の種類にもよるのですが、歴史・文化のところで属性によっては若干上がったり下がったりしているものもございます。自然の豊かさでも居住とその他のところで上がったり下がったりしているのが多少はございますけれ

ども、余暇も多少ですね、居住年数10年未満のところが上がっている部分もありますが、大体下がっているものはおおむね下がっていますし、上がっているものは上がっていると、そういった傾向があると思っています。

○吉野英岐部会長　この資料４は実際の報告書にも入れる予定ですか、つまり委員会資料というよりも県民あるいは外の人にも見せられる方向で考えているというところなのですか。

○池田政策企画課主任主査　事実の整理ですので、これを入れる分には問題ないと考えています。

○吉野英岐部会長　よろしいですか。あとはよく見ると主観的幸福感の 3.48 と一番左の上にあるじゃないですか。なんだけれども、この3.48を超える分野別幸福感というのはあまりないのです。実は平均値ですよ。3.48まで届いている分野別実感、12のうち3.48超えをしているのは右から「自然の豊かさ」、「地域の安全」、「家族関係」、以上しかない。つまり、３つしかない。ところが、残りの９つは低いわけですよね。

でも、主観的幸福感というふうに全般的な話を聞くと結構高く出るのです。だから、分野に分解しても必ずしも主観的幸福感が低くなることはないのです、これ面白いことにというか、その寄与度が違うというのですか、前の研究会のときもこの話はあって、必ずしも経済的なファクターだけで説明がつきづらい人、この主観的幸福感。だから、経済的なファクターは非常に低いのです、今でもこの必要な収入や所得2.56ですから、かなり低いというか、一番低いのか、分野の中では。だったら、これだけ低いのであれば相当押し下げ効果があるのかと思うのですが、主観的幸福感は3.48ですから、１ポイント以上平均値よりも高くなっているのですよね。さっき言った3.48を引っ張り上げてくれているのは、自然あるいは安全で、しかもかなり高いのは家族関係で、3.86というのはまあまあ高いですね。そんなに家族関係がいいのかと言われても、例えばいろんな人から御質問があった場合でも県民の実感度としてはこういう数字が出ていますということしか言いようがない。では、家族の関係がいいということが主観的幸福感につながるかというのはもうちゃんと見なければいけませんけれども、分野で見ても低いのだなという気が、並べてみるとしてきたなと。

○若菜千穂副部会長　これやっぱり理解するのに時間がかかるなと思ったのが、これ色を５色で分けているのですけれども、平均より高いか低いかという指標と、上がっているか下がっているか、上昇しているか低下しているかの２軸ですよね。そうすると、４つに整理したほうが素直な、平均より高いのだけれども、下がっているもの、平均より高くて、さらに上がっているもの、平均より低いのだけれども、上がっているもの、平均より低いのだけれども、下がっているもの、この４分類のほうが素直かなと。

○池田政策企画課主任主査　平均より下がっている、上がっているというのは……。

○若菜千穂副部会長　平均より下がっている、上がっているではなくて、平均より高いか低いか。低値というのは、これ平均より低いという意味なのですよね。

○池田政策企画課主任主査　すみません、確かにお話のとおり、今回新たな視点として入ってきた５年間ずっと低いというものになると前年度差を入れると余計ごちゃごちゃしてしまうのかなと思いまして、数字は入れてないものになります。黄色のところだけは５年間で３点より低いものをマーキングしているだけです。数字の入っているものは、前年に比べて属性の有意な差があるものです。確かに２軸全く分けてしまってもいいのかなとは思ったのですが、すみません、欲張って１枚で全体が見えるようにしようとしてしまったというのはお話のとおりだと思います。

○ティー・キャン・ヘーン委員　２軸になってしまうと、有意差も全部省いて……。

○若菜千穂副部会長　いや、有意差のあるものだけでいいのです。２軸なのかなと思ったので、この上昇、基本的には緑と青が重要で、前年より上がった、前年より下がったではあるのですけれども、もともと高いものがあった、もともと低いものが上がっただと政策的にも何か仕組みというのは変わるかなと。政策でよく重要度と満足度の４象限で分けると整理はしやすい。では、上がった、下がっただけで、残り３つはひょっとすると……。

○吉野英岐部会長　だいだいとピンクは上がった、下がったなのですよ、これ。だいだいとピンクは上がった、下がったなのだけれども、値そのものが低いものを取り上げているのですよね、ここはね、低値、３未満。

○ティー・キャン・ヘーン委員　計５年間３以下でずっと低いままという一つの視点も入っているのですよね。

○和川特任准教授　ここの議論というのは、最初に事務局から出た資料は上昇したものと低下したのだけだったと思うのですけれども、ただずっと低いものもやっぱり問題だよね、それも何か可視化した方がいいんじゃないかねということで、右側の３つの色が出てきたのではないかなと。実際見てみて、こうだねと分かったと。ただし、対外的に公表するときには分かりづらいねというのであれば、元の資料に戻し、上昇と低下だけにして、右側の３つの色はなくするというのもあるのかなと思いますけれども。

○吉野英岐部会長　あるいは低下のグループの色、例えば青色系で、ブルー系で今かなり強いブルーが低下ですよね。低下はしているのだけれども、低値というのはオレンジで暖色系なので、これは色としては逆張りなので、例えば低下プラス低値はもう薄い青にするとか、つまり青系は低下していますよというようなサインでもいいのかなという話ですね。それから、緑系は上昇なので、ピンクも上昇はしているのですよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　上昇はしているけれども、低値ですね。

○吉野英岐部会長　低値、だから薄緑。つまり、緑系は上昇の大きなグループで、青系は低下の大きなグループで、そのうち低値なのが今で言うと橙とピンクですよね。そうすれば、ぱっと見で青がいっぱいあれば全体が落ちているなとなるし、緑がいっぱいあるなといえば、全体には上がっているのかなというような一種の目の分類に、分類がやり易いやり方もあるなと思ったのですけれども、どうでしょうか。

○若菜千穂副部会長　そうですね。ということは、上昇は上昇で元々低かろうが高かろうが、今回はあまり見ないということで、見ないとして、結局はこれは低下したところを黄色は省くとして３つ、低下しているもののうちずっと低いものと、高いけれども一番この中で政策的に注目してほしいのはオレンジということ、オレンジが星３つで……。

○ティー・キャン・ヘーン委員　確かにおっしゃったとおり、低下していて、さらに低値で推移しているので、ここは重要ですね。

○吉野英岐部会長　あと低下幅というのは、これ見てないですものね、低下のポイントが大きくても小さくても青は青ですね。

○池田政策企画課主任主査　ここの点は先程もお話をさせていただいたのですが、どの値までいったら大きいのか小さいのかというのが判断できないというところがあって、こういった資料になっているというところでございます。

○吉野英岐部会長　だけれども、低下幅があまり大きいのがもしあったら、それはそれで問題ですよね、３よりは高いけれども、例えば前回 4.幾つあったのが今回 3.3 とか２に下がっていたら、３までは落ちていないから低値とまでは言い切れないけれども、低下の幅としては大きいので、深く考えるべきであるという言い方もできますね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　これは属性別という意味ですか。

○吉野英岐部会長　はい、属性で見て、属性、年代、職業あるいはどれで見てもがくんと落ちているのはあまりないですけれども、今回は。

○池田政策企画課主任主査　全体で見ると 0.3 ぐらい低下しているところはあるのですが、0.5 という、参考のところは例外として、それ以外のところですと 0.3、もう一つ高いと 0.4、学生、その他のところで仕事のやりがいという、これで 0.45 というのがありますが、それ以外に高いものだと 0.3 ぐらいです。

○山田佳奈委員　この表は大変に御苦労をおかけしたというか、これでよろしいのかなと。色というところは。１つ、今日資料６でお作りいただいているこのレポート（案）の方に分かり易く作っていただいているので、ここの分析をそれぞれ見ながら、個別に見ていっ

た方がやり易いかなという気もしないでもないのですが、どうでしょうか。

○池田政策企画課主任主査　事務局としても、これを横目で見ながら、分析を見ていただいて、その足りないもの等を御意見いただければいいかと思っています。

○山田佳奈委員　幅があるかどうかというのはそのときに見るというのがやりやすいかなと。

○吉野英岐部会長　せっかく色づけね、資料に色づけしているということは、色でもって一応分かりやすくしているということですよね。ですから、その色のグラデーションが人間の思考とずれなければいいというか、暖色と寒色が来ると逆の意味なのかなというようにも受取りがちなので、寒い色は常に寒くしておきますかと。

○池田政策企画課主任主査　色は追って修正させていただきます。

○吉野英岐部会長　ただ、みんな濃くすると後ろの数字が見えなくなってしまうから、あまり濃くはできないのだけれども、これで見れば青いところが課題ですねというような意味ですよね、まずは。なおかつ、前回議論であったどうしても低いところ、多少よくなっているかもしれないけれども、やっぱり低いところ、低いままで低空飛行でずっといっているところもやっぱりこれは１年、２年の問題というよりは恐らく構造的に考えていかなくてはいけない、問題としては評価していただいたということで、１年間の変化のところと構造的に低いままのところと両方あるので、いずれは両方議論していくということの資料になるのではないかなと思いました。

要は、こういったまとめ方で一回まとめていただいて、この後これを頭に入れながら全体のレポートの案を読んでいくと理解がよくなるかなというところでございます。

資料２と３の説明はいいですか。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、特に資料３はレポートで今回こういった黄色い部分ですとか、特に下がっている部分の理由の根拠資料という形になりますので、そちらのときに横目に見ていただきながらがよろしいかなと思います。

○吉野英岐部会長　レポートのバックデータですね、全部出すとこんな感じですよと。ただ、レポートとしては分量の制約があるので、このうち幾つかを使ってレポートで、説明というよう意味づけで２と３と。分かりました。

では、特に大きな異論がなければ、次の資料の説明に移っていきたいと思います。次の資料は、参考資料からいきますか。では、お願いします。

○池田政策企画課主任主査　それでは、前回部会長からこのレポートの使い方のところで評価の話を頂戴しましたので、内容といたしましては今政策評価専門委員会で御検討いただいている内容で、今後変更されることもあり得るのですが、事務局で考えている内容に

ついて簡単に御説明をさせていただきたいと思います。

参考資料の表面について、以前から総合評価という形で県民意識調査の結果も評価に入れてきたのですけれども、政策分野の評価に今回の分野別実感を、より実感を反映させた評価を行っていこうというふうに我々では考えているところでございます。「順調」、今までですと、基本的には客観的指標の達成状況で概ね見て、それらに必要なものを入れていくということになるのですけれども、今回はそれに加えて分野別実感が低下している場合には総合評価を１つ下げるというようなことを検討しているものでございます。ただ、全て下げるというのも評価上厳しいところございますので、指標の状況が順調なのだけれども、実感が下がっているというものについては評価を下げるというふうに考えています。ですので、順調と考えられるもので実感が低下していれば「概ね順調」で、指標の達成度の半数以上がＡまたはＢで、実感が低下したものについては「やや遅れ」というふうに評価を下げていこうというものでございます。

一方、その「やや遅れ」、「遅れ」ということで、客観的指標があまり芳しい状況にはないというようなものについては、実感が下がっているものがあったとしても、ここは下げない方向で今考えています。というのも、基本的に評価としては測るということになるので、客観的指標の動向というものにまず着目をしてございます。「やや遅れ」、「遅れ」になりますと客観的指標の動向と分野別実感の動向が同じく下がっていくということであれば客観的指標で適切に評価がなされているという考え方で我々のほうは整理をしているということになります。

実際評価レポートにどのように記載するのかというのが裏面でございます。こちら、８月から始まります政策評価レポートということで、我々は政策形成支援評価と言っているのですけれども、その中で評価をするときに指標の左側の赤囲みのところですね、そこのところに実感の記載をしていくということになります。当然、その分野は指標の動向があって、実感等を踏まえて総合的な評価をしていくということになりますし、右側に県民意識の状況ということで、特記事項の赤で囲んである県民意識調査の分析結果というところで今回本部会で御検討いただいた年次レポートの結果からこちらに記載をさせていただいた上で、そこの内容を検討した上での課題と今後の方向を記載しているというようなことを今検討しているというものでございます。

評価については以上です。

○吉野英岐部会長　こういう評価方式を取り入れたいので、御意見があれば伺いたいということでいいですか、この委員会の中では。

○池田政策企画課主任主査　基本的には評価形式は政策評価専門委員会で検討される内容ですので、本部会においては説明のみと考えています。

○吉野英岐部会長　このように使いますと。

○池田政策企画課主任主査　ええ、そうです。実際このような形で使われるものを今御検討いただいていますという、どちらかというと御紹介です。もちろん御意見があれば承り

ますが、最終的にはその内容も含めて委員会にお諮りするということでございます。

○吉野英岐部会長　分かりました。委員長が同じなものでね、こっちの委員会はメンバーはかなり代わるのですけれども、なぜか私は両方入っていて、こっちで検討したことがかなりの確率で評価に使われると。今までは赤字のところは入れていないのです、これまでの評価。結局県の担当部局が出してくるＡとかＢの数で評価をしてきたのですけれども、今回はこれに県民意識調査の結果を交えて最終評価を出していきますということで、かなり新しい試みになるでしょうね。実際は「順調」、「概ね順調」、「やや遅れ」、「遅れ」はほとんど順調なのでしたか、これまでは。

○池田政策企画課主任主査　今までの経過からということですか。

○吉野英岐部会長　そうです。

○池田政策企画課主任主査　「順調」はそんなに多くはなくて、多分「概ね順調」が多くなっていると思います。

○吉野英岐部会長　ですね。「遅れ」や「やや遅れ」はそんなにないですね、元々。

○池田政策企画課主任主査　「やや遅れ」は、それなりの数あると思います。やはり「順調」、「遅れ」という極端なところというとなかなか数としては多くないということです。

○吉野英岐部会長　全てがＢ以上と、これまで「順調」は。だから、実際はどうですか、分かりますか、廣田さんも。これまでの評価で「順調」というのは全体の何割ぐらいあるのでしたか。トップの「順調」は。

○廣田政策企画課主任　私も全部把握しているわけではないですけれども、恐らく１割とか２割とか。

○吉野英岐部会長　枠組みも変わりますよね、今度は分野別評価になってしまうけれども、前は項目別評価だから、違うけれども、大体「概ね順調」で収まってしまうのでしたっけ。

○廣田政策企画課主任　「概ね順調」と「やや遅れ」が７、８割程度と思います。

○吉野英岐部会長　だから、今回はこの新しい評価、「概ね順調」から「やや遅れ」に回ってしまう可能性があると。

○廣田政策企画課主任　あると思います。

○吉野英岐部会長　むしろ評価が下がる可能性があるということですね。

○廣田政策企画課主任　そうです。

○吉野英岐部会長　評価上がるというのはあまりないと。

○廣田政策企画課主任　上がるということは今のところはないです。

○池田政策企画課主任主査　我々としても、今回実感を入れるということがあって、指標と実感は違うのではないかというお話も御意見として頂戴したりする部分もございます。今回の計画は、実感というところに力点が置かれているということで評価をしていますので、どうしても我々はやってみないと分からないのですが、下がってくる部分あると思いますし、逆に上げないという部分については、やはり県としては厳しめの評価をしていこうというようなところも視点として持ってございます。

○吉野英岐部会長　県は何もしていなくても、世の中が順調だったら県の評価も高いということには使わないと。

○池田政策企画課主任主査　基本的には指標設定して、目標設定していますので、それが達成されることで、我々とすれば実感も上がっていくだろうとは思っています。通常として、上げられるプラスアルファと、それ以上いっているかどうかというところの差を評価できないというところがあるので、このような形です。

○吉野英岐部会長　こういった県民意識調査を政策評価までやろうということで、今度提案することになるのですが、確かにあまりやっていないですよね、他県では。

○池田政策企画課主任主査　ここまではないかと思います。

○吉野英岐部会長　いわゆる県民意識調査とか、道民、都民、府民意識調査というのは恐らく多くの県で５年に一遍とか毎年とかやっていらっしゃると思いますが、それで幸福のこともそこで聞いているところもあるとは思いますが、それをある意味政策評価のツールとして使っていくというのが今回の一つの大きなチャレンジで、どういう御意見が出るか、これからなのですけれども、せっかく県民意識調査を使っていろいろ分析をかけている以上、これをきちんと評価のところまで使えるように持っていきたいという意欲の表れと言ったほうがいいでしょうね。

○池田政策企画課主任主査　ええ、そのように言っていただければ。

○吉野英岐部会長　ということで、こういう使われ方がされますので、御理解いただければということで、参考資料という扱いですので、審議ではないのですけれども、評価分野でも使えますということですが、御意見はいいですか。

○山田佳奈委員　意見といいますか、感想ぐらいのところで恐縮なのですが、政策の客観的な達成度というのは、これはいつの時点で測るかというと、年度末で測ると。

○池田政策企画課主任主査　令和元年度の指標の達成状況というのを測ります。

○山田佳奈委員　ということなのですね。

これはここの部会で議論することではないと思うので、あくまでも感想というぐらいなのですけれども、県民意識調査というモデルの一面の、実感のところでどうなったかということが即政策がどうだったかといったところと、多分そこはイコールになり得ないような気がしているのです。つまりどの時点でこの皆さんが意識を持たれるかというところも私は気にはなっているので。もちろんこれは実感を入れたらまずいという話ではなくて、政策評価のところに実感のその年度の政策とどう対応させるかというところで、少し慎重なところが必要なのではないかなと。非常に細かいところですけれども。これ言い始めると何も言えない、場合によってはですね。というところも出てくるのですけれども、そこの距離感は必要になってくるような気がするのは私だけでしょうかという感想ぐらいです。

○池田政策企画課主任主査　お話のとおり、基本的にこの実感を調査するのが１月、２月で、計画としては県の政策としては４月から３月という形になっていますので、その年度中に実態を把握するとなると大体これぐらいの時期になってしまうのはやむを得ないのかなと思っています。

政策形成支援型評価は、お話のとおり、確かに昨年度の実績をもって来年度の政策を形成するという関係でございますので、評価レポート上は今年度の取組状況も踏まえて評価をすることにしています。ですので、昨年度の結果、今年の状況、それらを踏まえて来年どうしていこうかということでありますので、あくまでもここで言う評価の部分については基本的には昨年度実績ベースでまず考えて、評価をするということになれば意識的にはほぼほぼ近いものを取り込めているのかなと考えてございます。

○山田佳奈委員　県の評価レポートがどういうふうに書かれるのかは、私もよく存じ上げませんけれども、それがどういうタイミングのものか、どの時点のものかというのさえ、多分明記されるのだと思うので、それさえあればよろしいのかなというところです。ありがとうございました。

○吉野英岐部会長　5,000 人調査がほぼほぼ年度末に近いところでやっているということで、２月、３月で駆け込みでどんどん政策を打って、その効果は確かに反映しきれないかもしれないけれども、普通は通年で政策はやるので、１月、２月に測ればほぼほぼ結果出ているのではないかと、反映されるのではないかと。確かに実感されるまで時間のかかるような政策というのがないとも言い切れないかなと。実感しない方が悪いのか、じわじわと効くものだよと、こういう政策はというのがあるのですかね。

○池田政策企画課主任主査　お話のとおり、実感というのは政策の性質もいろいろあって、すぐ実感に反映されるもの、なかなか反映されないもの、様々あると思います。そういったものを、我々とすれば今回こういったチャレンジの評価をしていく中で、そういったものを今後検討していく必要があるかもしれないのですが、我々としてもこの状況を掴めていないというところもありますので、まずはこの形でチャレンジしてみようということで御提案をさせていただいているというものです。

○山田佳奈委員　今まさに吉野先生におっしゃっていただいた、単年度ではなかなか測りにくいことというのもいろいろあると。例えば教育に携わっている人間からすると、そんなにすぐ結果が出てくるというのはなかなかないと言わざるを得ないところもあると、そういうのも念頭にありました。ありがとうございます。

○吉野英岐部会長　すぐ結果出せというのもあるけれども、なかなかそう簡単に政策効果が一遍には出ないというのも確かなことでしょうね。それは、でもしょうがないので、取りあえずは評価を毎年やっているので、これはね、５年に一遍評価するだけならまだいろいろやり方もあるけれども、毎年、毎年政策評価というのは実は行われているので、そういうスパンに合ったような形でこれはやっていくしかないので、ちょうど県民意識調査を毎年やっているので、それを使うということになると思います。県民意識調査も５年に一遍だとか、どうでしたっけ、市町村はそんなものですよね。

○和川特任准教授　都道府県とか市町村によっては３年、５年、隔年というところはあります。

○吉野英岐部会長　毎年やっているところが少ないのでしたか。

○和川特任准教授　最近評価に取り入れようとか、そういう試みは少しずつできてきているので、比較的毎年取るというところがメインストリームになっているのではないかなと思います。

○吉野英岐部会長　結構お金と時間をかけてやっていますからね。それを使わない手はないと。

　では、政策評価はこの形で進めていただきたいということで、資料５から説明してもらいましょうか。

○池田政策企画課主任主査　資料５についてでございます。こちらにつきましては、表題のところは平成 31 年調査と令和２年調査の比較という記載がありますが、基本的にはこちらの内容といたしましては、令和２年調査を一元配置分散分析をした結果ということになります。ですので、その属性の中で高かったものはどれで、低かったものはこれですよという内容を単純に記載して示しているというような中身になります。

おめくりいただいて、1ページですと主観的幸福感の内容について説明してございます。昨年もこれと同じ資料をこの部会にも御提出をさせていただいていますが、下のグラフにアスタリスクがないものから３つまでついてございます。

２ページの右下のところに判定書いてございます。この中で、基本的にアスタリスクが２つ以上、つまり５％水準以上で有意差があるものについて今回整理をしているということになります。したがいまして、主観的幸福感におきましては属性別に見ると男女別、職業別、世帯構成別、子の人数別、居住年数別という分野において有意な差が確認されたということでございます。男女別では女性が高く、男性が低いですとか、職業別では家族従業者が高くて、60 歳以上の無職が低い。世帯構成別では、夫婦世帯が高く、その他世帯が低いというような、その他そういったような形で整理をしているものでございます。その下に今般の平均値について、ここは昨年調査との比較ということで有意な差があるだろうと、今までこちらは色々な形でお示しをしていただくことでございますので、今年調査の中で高いものはどれ､低いものはどれかということを御説明させていただいてございます。以降、各分野についても同様の整理をしてございまして、この内容もレポートの中にぜひ取り込んでおいていきたいということで、今回資料として御提示をさせていただいているというものでございます。

あと詳細は、追って資料６で御説明させていただければと思います。

○吉野英岐部会長　全体の主観的幸福感と、あと分野別の幸福感について、このグラフの形で２年間の動きを出しまして、有意な差があるものについてはアスタリスクが打ってありますよということです。目で見る調査結果です。時々すごく低い値があるのですけれども、これはほとんど参考データというのですか。サンプル数が非常に少ないやつ。

○池田政策企画課主任主査　そうです。例えば５ページの余暇を見ていただいたときに、あまり大きくないですが、いずれ参考とついているところは母数が少ないので、例えば年代別なんかを見てしまうと 18 から 19 は参考で 43 しかサンプル数がない｡そういった参考の部分は、やはりサンプル数が非常に少なくなっています。余暇の充実の左下にある、５ページの左下にある職業別なんかでは「60 歳未満の無職（参考)」ですが、これも 64 となっていて、かなり大きな下げ幅で動いていますが、こういったものについてはあくまでも参考ということで記載をさせていただいております。

○吉野英岐部会長　一見どんと落ちているようにも見えるのだけれども、元々非常に数が少ないので、１人、２人動くとかなり変わってしまうと。あとすごく高いのとすごく低いのとか､非常にサンプル数が少ないので､ある数名が高くつければどんと高くなるという、そういうデータ上の信頼性の問題があるので、それを載せてはもらっていますけれども、参考と書いてあるのはあくまでも参考だと考えてもらえればいいのではないかなと思います。これはこうなっていますということですね。

○池田政策企画課主任主査　はい、そうです。

○吉野英岐部会長　いいですかね、こういう状況ですと。時々ビョーンとした動きがあるのですけれどもね、全然全体の動きと全く関係ないような動きがありますよね。例えば21ページの必要な所得や収入の年代別で若い人18歳、19歳が物すごく上がるのです、21ページか。突き抜けて上がっていくのですけれども、ここからサンプル数43しかないということなので、若い人の実感を本当に反映できたかというのは難しいということで、全体的には下がっている方向で全体は考えたほうがいいということなのでしょうかね。

では、これでよろしければ最終的に私たちがこの部会としてやる仕事の大事なものとして、親委員会に出すレポート、年次レポートについて今日の時点である程度形をつくっていきたいということですので、資料６の説明に入りますか。

○池田政策企画課主任主査　資料６につきまして、第１回から色々な形で資料を御提供させていただいたり、御審議をいただいた内容を踏まえまして、今現時点で事務局側として、こういった形でという御提案の資料でございます。前回頂いた意見等も踏まえながら御説明をさせていただきたいと思うのですが、おめくりいただきまして１ページのところです。前回県民意識調査と補足調査の違いといいますか、その関係性というのが少し見えるようにということで、なかなか図示すると分かりいい形にはあまりならなかったものですから、今回は県民意識調査と補足調査の違いという形で表を２の分析事項に入れさせていただいてございます。

あとおめくりいただきまして、本部会でやる内容ということで、意識調査の属性分析です、先程御説明あった資料５になりますけれども。令和２年度の属性分析ですとか、平成31年から今年調査の時系列分析、あとは低値で推移しているものについて分析を行っていくという内容を記載してございます。前回部会におきましてお話がございました、今回行う分析に係るスケジュールと申し上げましょうか、今後こういった形でやっていきますよというようなものを図表化させていただいています。昨年につきましては、補足調査の設計ですし、あと過去の県民意識調査の分析というものをやっていただいたところでございます。今年度につきましては、県民意識調査に係る分野別実感の変動要因の分析ということで、こちらについては来年も同様に行っていただきたいと思ってございます。令和４年のところでは、県民意識調査の分野別実感の変動要因ですとか幸福関連指標との関連性との検討を行っていくというような流れで、最終的にはこの４年間を振り返ったときに幸福関連指標との関連性等の検討を行っていただくということが先に見えているような形で表を整理させていただいてございます。

これらを踏まえまして、実際の今年の調査結果ということで県民意識調査の調査結果をお示ししてございます。こちらにつきましては、速報等でお示しした内容から抜粋して整理をさせていただいてございます。

主観的幸福感のところにつきましては、幸福と回答した人56.2%ということで増えているということでございますけれども、平均点から見ていきますと3.48点という形で、若干低いような形になっているというものでございますし、分野別実感につきましては昨年との比較ができるような、全体が見える整理をしてございます。

おめくりいただいたところで御判断する際に留意する事項ということで、こちらを入れさせていただいているので、まず県民意識調査結果というのはこういった形での整理と考

えてございます。

続きまして、７ページから補足調査の結果ということで、こちらも御指摘を踏まえまして、県民意識調査結果と同じような形でまずは属性等の整理をしてございます。

おめくりいただきまして、こちらの調査の目的が変動した実感の理由の整理ということでございますので、まずは「感じない・あまり感じない」、「どちらともいえない」、「やや感じる・感じる」という３つに区分して、それらの主な意見というものを各分野ごとに整理してございます。

次の９ページのところでは、その中で実感に変動があった方、「実感が低下した人」の回答、「実感が横ばいの人」の回答、「実感が上昇した人」の回答に分けて主な理由を整理してございます。ただ、従前お話のとおり、「からだの健康」、「こころの健康」については、平成 31 年は「心身の健康」で聞いているものですから、こちらは単純に今年の「からだの健康」と「こころの健康」に分けて調査した補足調査では比較ができないということで、こちらについて記載ができていないということで、そこは御容赦いただきたいという趣旨でございます。

それらを踏まえまして分析、こちらで今まで御審議をいただいてきた内容の分析結果ということで記載をしてございます。

記載順といたしまして、３番のところに分析方法と書いています。この分析方法の順番にこれ以降記載をしていっております。１つ目としましては、まずは昨年調査から今年調査の分野別実感における時系列変化の有無をｔ検定で検証した内容について記載をするということをしてございます。

続きまして、先程の資料５になるのですけれども、令和２年県民意識調査結果の属性差の有無を一元配置分散分析で検証した結果を記載してございます。

それらを踏まえて、平成 31 年調査と今年調査の各属性における分野別実感の時系列の変化の有無を検証して、その結果を踏まえて補足調査結果等から得られた分野別実感の変動した人の回答理由などを用いて変動要因を推測するということを行います。

最後に、先程お話のありました調査開始時から低値で推移している属性について分析を行うと、低い値で推移している理由を、要因を推測するというような作業で整理を行ってございます。

おめくりいただきまして、12 ページ、主観的幸福感から記載をさせていただいてございます。こちら、①として県全体の幸福感は５点満点中 3.48 点と、昨年度と比べて有意な差があるとは言えないために横ばいという形で整理をしてございます。

②といたしましては、一元配置分散分析ということで、今年の調査上は性別は女性、職業別では家族従業者、世帯構成別では夫婦のみ世帯、子の人数別では３人、居住年数別では 10 年未満というのがそれぞれ高いというような結果になってございます。

③番ということで、昨年調査から今年調査の時系列変化についてｔ検定を行った結果ということで、下の表に記載をしてございます。本日の資料といたしまして、資料１でございますけれども、レポートとして記載する分では属性の変化のあるところだけお示しした方が分かりやすいと思いましたので、属性の変化があった部分のこちらでお示しをさせていただいてございます。この４つの属性について、実感が有意に上昇しているということでございます。

④といたしまして、主観的幸福感のところだけなのですけれども、先程の速報の調査結果のところで御説明いたしましたように、幸福感を判断する項目、順位が出てございます。健康状態と家族関係というのが非常に高い、重視されているというようなことですので、そういったものを今回入れさせていただいてございます。右側には昨年との各属性の集計の推移をグラフ化させていただいています。これも昨年と同様な形でつくっているものでございます。

続きまして、14ページ、分野別実感に移っていただきます。こちら、当初の部会資料といたしましては、過去からのを全て載せておりましたけれども、今回は新しい計画にのっとった評価に使う分析ということですので、基準年である平成31年と令和２年というので、まずは時系列分析の比較をお示しさせていただいてございます。こちらにつきましては、１分野で上昇、５分野で横ばい、６分野で低下という形でなってございます。

これらを踏まえて、各上昇、横ばい、低下の順に項目の分析を記載してございます。上昇した分野ということで、上昇した分野につきましては「心身の健康」ということになっています。平均点といたしましては3.15点、昨年調査よりも0.15点上がっていて、有意に上昇しているということでございます。

②といたしましては、今年調査について一元配置分散分析を行った結果ということで、「女性」、「20代」、「家族従業者」、「夫婦のみ世帯」で「子の数が２人」、「居住年数10年未満」がそれぞれ高くなっているというような形でございますし、昨年調査から今年の属性別の時系列変化については、表７に記載している形で各分野、男女両方ともですとか、30代から60代などかなり幅広い属性で有意に実感が上昇しているという形になってございます。

おめくりいただきまして、16ページ、④番ということで、こちら、黄色いマーカーがついていました。平成28年調査から今年までの調査で低値で推移している属性ということで、その他世帯が該当してございます。そちらにつきましては、低値で推移して、属性の動き、平均点の動きは表８で示させていただいております。2.78点から2.96点の中で推移しているということで、これらの理由というものについては補足調査から「あまり感じない・感じない」と回答した人の理由を要因として推測した記載をさせていただいてございます。こちらは、からだとこころを分けてございますので、それぞれの理由を記載させていただいています。

続きまして、横ばいということで「家族関係」も同様の分析をしてございます。こちらにつきましては、「家族関係」の実感ということで平均点は3.86点で0.02点上昇はしてございますけれども、ｔ検定の結果では横ばいということで整理をしてございます。また、今年の調査は一元配置分散分析を行った結果、年代別では「20歳代」、職業別では「学生」と「その他」、世帯構成別では「夫婦のみ世帯」、子の人数としては「子どもが１人」というのがそれぞれ高くなっているというものでございます。

③番、昨年調査から今年調査の属性別の時系列変化については、こちらは有意な差があるのはなかったということになっております。

次に、「子育て」の実感のところですけれども、こちらにつきましては、実感の平均点が3.07点ということで、昨年より0.1点低下してございますけれども、ｔ検定の結果、有意な差が認められないということで、横ばいという形の整理になってございます。

②ですけれども、今年調査について一元配置分散分析を行ったところ、年代別では 70 歳以上、職業別では家族従業者、世帯構成別では「３世代世帯」、子の人数としては「１人」がそれぞれ高いというような結果になってございます。

③につきましては、昨年調査から今年調査、属性別の時系列変化について、ｔ検定を行った結果、有意な差があったということでは「30 代」ということになってございます。

④番、平成 28 年から今年調査まで低値で推移している属性ということで、年代別で見てみますと 20 代がそれに該当するということで、こちらにつきましても先ほどと同様に補足調査結果から、20 歳代の属性の中で「あまり感じない・感じない」というような回答をした方からの理由を低値で推移している要因と推測をして記載しているものでございます。内容といたしましては、「子育て支援サービスの内容」、「子供の教育に係る費用」、「子育てにかかる費用」、「自分の就業状況」というようなものが挙げられているというものでございます。

このほか世帯構成別で見ましても、「ひとり暮らし」と「その他世帯」がそれぞれ該当してございますので、それらについても同様の属性別の要因を推測してございます。「ひとり暮らし」では、「子供を預けられる場所の有無」ですとか、「子供の教育に係る費用」、「分からない」というものはどのように取り扱うか、我々も分からなかったのですけれども、一応理由としては挙げられているというものでございます。「その他世帯」につきましては、「子育てに係る費用」、「子供を預けられる人や場所の有無」、あとは「子供に関する医療機関の充実」というようなものが挙げられているということになりますし、子の人数別で見ますと「子供はいない」という方のところで実感の平均値が低値で推移しているということがございますので、こちらも同様の理由から「分からない」、「子供の教育にかかる費用」、「子育てに係る自分の就業状況」といったような理由が挙げられているということになります。

おめくりいただきまして、18 ページで子供の教育に移っていきます。こちらにつきましても実感の平均点は 3.09 点ということで、昨年調査より 0.01 点低下していますが、ｔ検定の結果、横ばいという形で整理をしてございます。令和２年調査結果についての一元配置分散分析の結果につきましては、年代別としては「70 歳以上」、職業別では「家族従業者」、世帯構成別では「夫婦のみ世帯」、子の人数としては「子どもが２人」がそれぞれ高くなっているということになってございます。平成 31 年調査から今年の調査の属性別の時系列変化についてｔ検定を行った結果につきましては、有意な差が見られた属性はないということになってございます。

続きまして、④ということで、平成 28 年調査から今年調査まで低値で推移している属性は、年代別で見ますとこちらも「20 代」ということになってございます。その要因として考えられますのは「人間性、社会性を育むための教育内容」、「学力を育む教育内容」、「不登校やいじめなどへの対応」、「図書館や科学館などの充実」、「分からない」というような回答が出されているということになります。こちら、20 代の部分で属性が少なくなっておりますので、回答のところもほぼほぼ拾い上げてしまうというような形にはなっているのですけれども、次に子の人数別で見ますと、こちら「子供はいない」という方のところで実感が継続して低いということで、要因といたしましては「学力を育む教育内容、人間性、社会性を育むための教育内容」、「不登校やいじめなどの対応」、「分からない」というよう

なことが挙げられているというものでございます。居住年数別で見ますと「10 年未満」も実感が低いということで、こちらの要因といたしましては「学力を育む教育内容」、「学校の選択の幅」、ここはやはり居住の関係ですので、そういった要因が出てきてございます。あと「地域での教育、学び」ということになります。

続きまして、19 ページの住まいの快適さということで、こちらにつきましては実感平均値 3.29 ということで、昨年調査よりも 0.05 点低下していますが、ｔ検定の結果、有意な差はないということで横ばいというふうに整理をしてございます。今年調査の一元配置分散分析の結果につきましては、性別としては「女性」、年代別では「70 歳以上」、職業別では「専業主婦」、世帯構成別では「夫婦のみ世帯」、子の人数別では「子どもは１人」、広域振興圏別では「県央広域振興圏」がそれぞれ高い形になってございます。

③番でございます。平成 31 年調査から今年調査の属性別の時系列変化ということで、男性で実感が有意に低下したものがございますが、それ以外の属性では有意な変化は見られておりません。

○吉野英岐部会長　一回切りますか。一生懸命丁寧に説明していただきました。まだ今日も時間はありますので。

○吉野英岐部会長　前半、後半に分けて年次レポートの内容を確認していただきたいと思います。前半が終わったところで、一旦休憩入れましょうかね。

年次レポートについては、これはバージョンもう４ぐらいですか。

○池田政策企画課主任主査　今は６とか７くらいかと。

○吉野英岐部会長　バージョン６、７と、細かいことを言うとね。御苦労されているのは後半部分で、レポートの大きなⅠとかⅡとかⅢぐらいまではこのとおりですよということが書いてありますので、特段議論する必要もないと思っています。Ⅲの調査結果の１の１も、もうこれもこのとおりですよと、こういう調査対象者でこういう回答者を頂いていますので、まず載せましたよということで、３ページまではよろしいですかね、事実関係を書いていただいてということです。

そして、その後バージョンが上がって書き直して、４ページの調査結果の概要というところからですね。まずは、主観的幸福感のこれは５年間ですかね、５年間の推移を４ページでもって書いていただきました。これは幸福というのは、「幸福だと感じる･やや感じる」を足した数、それから幸福と感じないと、さすがに不幸とは書けませんので、幸福と感じないというところは、後ろの「感じない・やや感じない」を２つ足したらこういう数字になっていると。いいんでしたっけ、「感じる・やや感じる」が足して 56.2%、「幸福と感じない」は 17.6 だから、合計して 100 にならないというのは「どちらともいえない」という人が結構な数いますので、合計しても 100 にはならないと。

○池田政策企画課主任主査　そうです。

○吉野英岐部会長　そうするとよくマスコミに出ている数字は、56.2 という数字が出ていくということですね。これを５点法でもって感じるという人を５点にして、全然感じない人を５点で振って、５点法にすると平均値というのが出せますので、それで見ると 3.48 と。

谷藤委員がお見えになりました。どうもお忙しいところを。

○谷藤邦基委員　遅くなりまして、すみません。

○吉野英岐部会長　いえいえ、ちょうど佳境に入るところでした。今資料の１から５までの確認を終えまして、さらに参考資料の確認を終えまして、資料６の年次レポート、最終的にこれが親委員会に出す部会の成果ということですので、この記述内容についてこの委員会で改めて確認するという作業を今行っていたところです。それで、事務局からこの資料６の前半部分をまず御説明いただいて、実感が横ばいだというところまで、ページでいいますと 20 ページの前半部分までを今御説明をいただきまして、その内容についてまず前半部分の討議をしようとしています。それで、一旦休憩を入れた後で後半部分の説明をまたいただいて、それで実感が低下しているというやや重い課題もということですけれども、そこを御説明いただいた上で討議をして終わろうという予定で、一応予定では５時、17 時を目途にというふうに進めていきたいところであります。

それで、今しゃべっていたのがこの年次レポートの３ページぐらいまではもう今まで何度も説明を受けてきたり、事実関係のところですので、もうこれはこのとおりということで、４ページ以降に焦点を絞って皆さんから御意見があれば伺うということにしたいと思って進めているところです。４ページが主観的幸福感の推移がこのとおりですので、これは出てきた数字と同じなのですけれども、感じるが 56.2%、５点法に直すと平均点で 3.48 点というような数字が出ているということです。

それで、５ページはこれも前回直してこうなったのですかね。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　５ページは、それぞれにおいて「感じる・やや感じる」、「どちらともいえない」、「あまり感じない・感じない」、「わからない」、この辺をきちんと評価出しましょうということで、帯グラフの中で７つの区分でもって数字を出してもらって、令和２年と平成 31 年度の分を一遍にお見せしているということです。これは、数字はこのとおりということですね。

６ページは、幸福を判断する際に重視する事項の回答状況について多い順に並べていただきまして、健康状況が一番多いというような結果になっているというところで、ここまでは全体的な状況を棒グラフでもって、あるいは折れ線グラフでもって説明をしましたというところですけれども、ここまではいいですか。

その後、７ページが今度は 600 人調査のところですね、補足調査の全体の内容と回収結果について７ページで御説明がありました。８ページが補足調査では、その理由も聞いていますので、補足調査から分かる範囲でのそれぞれの分野別実感の理由をここに主に３点程度ですかね、出していただいています。これは前と一緒ですか。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　前と一緒ですね。それで、さらに表４も同じく補足調査から分野別実感の変動した人についてのみピックアップして、その理由をそれぞれ低下した人、横ばいの人もあるのですけれども、それから上昇した人で理由をピックアップしていくということですね。これも前回出したところですね。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　といういろんなデータを踏まえて、分析結果というのが 10 ページからです。ここも逐一説明いただきましたけれども、分析の視点、それから使うデータ、方法、主にｔ検定と一元配置分散分析でもってやっていきますよと、あらかじめここで言明をして調査分析の結果に入りますということで、12 ページからがその分析結果です。

大きなところでいいますと主観的幸福感はほぼほぼ横ばいであると、大きな差、ｔ検定の結果でも差はないので、横ばいだとここは言いましょうということですね。それで、一元配置分散分析の結果、性別では女性、職業別では家族従業者、世帯構成別では夫婦のみ、子の数で３人、居住年数で 10 年未満がそれぞれ高いのですね。高くなりましたというか、高いですね。別に年次比較ではなくて、同じ年度の中で男性と女性を比べると女性が高いということですね。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　男性が相対的に低く、女性が高いというようなことが書いてあります。

それから、時系列変化についてｔ検定したところでは 50 歳代、ひとり暮らし、10 年未満の居住年数、それから県南広域で有意に上昇しているということでした。幸福感を判断する上で、特に重視された項目は健康状態でした。有意に上昇したというものの③について、表５ということですかね。

○池田政策企画課主任主査　そうです。すみません、ここに書いていませんでした

○吉野英岐部会長　うん、③について表５で数字を入れましたということですかね。これもこのとおりということでいいでしょうか。

その後図５以下はさっき出ましたけれども、折れ線グラフで示すとこんな感じで上がった下がったが見えるようになりますよということでした。

14 ページは分野別実感の、分野別の点数ですね、平均点、これまた検定に使うので、こう出して、これ前も出ているやつですね。ここで３つに分けて考えましょうということですよね。上がったやつと横ばいのものと落ちたもの、３つに分けて、最初は落ちたものだけ考えようかということだったのですけれども、せっかくあるので、上がったことも考えようと。

それで、上昇した分野について、15 ページで書いてございます。上昇した分野というのは、実は１個しかないので、心身の健康状態が上がっているので、それについてこういった説明がつくのではないかというようなことを書いていただいているのが 15 ページと 16 ページの途中までです。特に数字は間違いないということですので、病院についての記述というか、こういう分析でよろしいかということですが、この 16 ページの④のところで、その他世帯で「あまり感じられない・感じない」という答えが多かったところなので、その他世帯のそう感じる理由を補足調査の中からピックアップするとこの３つ、さっき言った３つの要因、理由というのをここに抜き書きして３つずつ挙げたと。ただ、補足調査は、ここは確か１個しかないのですよね、データがね。だから、こういう書き方になると。いいですか、上がった理由として、調査結果がこうだから、このとおりだというのはそのとおりですけれども、質問や自分の実感と違うというのがあればお願いします。世帯構成のその他というのはそんなに少なくないんでしたっけ、その他は学生でしたっけ。世帯構成のその他というのは、Ａ３の大きな表で見ればいいのかな。

○池田政策企画課主任主査　393 サンプルということになります。

○吉野英岐部会長　ありますね、400 ぐらい。世帯構成のその他、はい。ここだけ低位のままでしたっけ。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　それはこういう理由ではないかと、低位というのは先ほどの委員会の説明でもありましたが、３点未満。５点満点で３点に届かない、５年間やっても３点に届かないというものを低位とここでは表記しているものです。その他の世帯、よく分からないですね。どういう世帯なのですかと言われたら、上に該当しない世帯ですと。

○池田政策企画課主任主査　一応例示的なところで、15 ページのところで表記させていただいて、去年のレポートでも同様な表現していますが、寮ですとかグループホームなどと記載していますし、その他考えられるとすれば同棲のようなものとか、同居している方々がいるとか、そういったようなものであればそういったものに入ってくるのかなと考えております。

○吉野英岐部会長　グループホームというのは一時的ではないか。寮だと一時的な居住形態というふうな。グループホームはずっといるのでしたっけ。あと４世帯以上というのはこっちに入るのですか。

○池田政策企画課主任主査　そうです。

○吉野英岐部会長　それはいないですかね。

○池田政策企画課主任主査　若干いると。

○若菜千穂副部会長　これ後で言おうと思ったのですけれども、その他という以上、ここにまとめとして上げるのは適切ではないかなと。いろいろ含まれます。

○吉野英岐部会長　いろいろ含まれてしまう。

○若菜千穂副部会長　いろいろ含むのをこういうふうにくくって、しかもまとめ的な形で触れるというのは適切ではないかなと。

○吉野英岐部会長　しなくてもいいと。

○若菜千穂副部会長　うん。

○池田政策企画課主任主査　今回我々でまずは情報をフルで上げていますので、今のような御意見のもとに加除修正ぜひしていきたいと考えておりますので。

○吉野英岐部会長　そうなんだよね、どういう家族、居住形態かというのが、世帯構成か、言いづらいというのが、いろいろごっちゃに入っている可能性もないわけではないので。

○谷藤邦基委員　事実婚みたいなのもどこに入れるか迷うところです。

○吉野英岐部会長　夫婦のみとまでは言わないですか。

○谷藤邦基委員　自分たちはそう思って、そこに丸する人もいるかもしれないし、その他にする人もいるかもしれないし、多分いろんなパターンが出てきそうですよね、明示して事実婚はこちらにしてくださいとは。

○吉野英岐部会長　そこまでは書いてないですね。あまりたくさん書き込んでも中身が分からないから説明になっているのだか、なっていないのだかと言われてしまうと。ここはその他が多かったというだけにとどめておきますか。だから、どうなのだというのは確かに。では、政策的にどうしたらいいのかと言われても相手が、ターゲットが多様なので、何とも手がピンポイントに打てないというか。

○池田政策企画課主任主査　ここ④は削除という理解でいいですか。

○若菜千穂副部会長　私はここは触れるべきではないと思います。もっと別なところを触れた方がいいと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長　そうですね、触れても意味があまり出てこないと。

○若菜千穂副部会長　その他、今おっしゃられたようないろんな属性が入っているものを１つの属性としてこういうふうにまとめを書くのは適切ではないと思います。

○吉野英岐部会長　なくてもいいですかね。ティー先生いいですか。

○ティー・キャン・ヘーン委員　事実を述べるだけであって、これ以上分析しようがないので、逆を言うと、この委員会でこれは載せない、あれを載せると、例えば全部低いままのやつをこれは載せない、あれは載せると、そこの判断どうなのかなと思ったのですけれども。

○吉野英岐部会長　していいのではないですか。

○ティー・キャン・ヘーン委員　だから、ここは載せなくていいですよね、次は載せる基準は何ですかということです。

○吉野英岐部会長　例えば今の話だと、その他の扱いは非常に難しくて、様々な形態がここに含まれてしまっていて、本来であればその他というのは少ない方がいいのですけれども、結構な数出ているのです、400 ぐらい。

○若菜千穂副部会長　うん、393 ですね。

○吉野英岐部会長　はい、これ全体の中から見たら、全体が 3,000 ぐらいでしたか、１割ぐらい。

○谷藤邦基委員　ひとり暮らしより多いですから。

○吉野英岐部会長　そうか、ひとり暮らしより多いですよね。世の中にひとり暮らしというのは結構多いはずなのに、その他に回ってしまっている可能性もないわけではないということですね。だから、恣意的に落とすというのは非常に解釈が難しい。その他にこんなに入るはずではなかったというか、そう見れば、その他のところが低位だというのは言ってもいいと思うけれども、その要因分析は難しいと、そういう意味です。低位だというのは間違いないので、低位と書くのは全然オーケーだと思うのです。分析までには材料不足。

○若菜千穂副部会長　世帯構成で分析したいときにその他は死に票になるという扱いですよね、通常というか、私が分析するに当たってはそうします。その他の中で、その他のときに括弧つけていますよね、そこで同棲とか事実婚とか書いてあれば、それは恣意的に夫婦のみに分けようという、そうした上での残りが 393 だとしたら、これは世帯構成で見たときには死に票ですよね、分析はできないと思いますけれども、どうですか。

○和川特任准教授　私も同感です。基本的に「その他」というのは分からないもの一般ということで、分析から除外することが一般なので、事実として載せるという選択肢もあるし、そもそもそれは見ないというやり方、どちらでもあるかなと思うのですが、現時点でこれを細かく分析する意義というのは私もあまりないかなと。もしも課題があるのであれば、「その他」が課題なのだから「その他」は別な取り方をしようねということはあるかもしれないのですけれども、今の段階で分析を深掘りするというのは生産的ではないかなとは思います。

○若菜千穂副部会長　ここの 15 ページ以降の整理なのですけれども、私の考え方があれなのですけれども、この①、②、③、④があるところと⑤とか⑥とかあるところはあるのですけれども、これ丸をつけるのは、私は小見出しにするべきだと思っていて、この後全部そうなのですけれども、①について、①の部分で上昇している、上昇していない、ｔ検定を行った結果、上昇していますとか、この後全国の①についてはもう要らないかなと、それは何でかというと 14 ページで触れていることであって、①は全部なくてもいいのではないかなと、載せるのであればこの 14 ページのところで載せたほうがいいかなというのが１つと、あと②以降なのですけれども、②が恐らくこれ単年度の属性の差を見ているのですけれども、それであれば属性の違いみたいなタイトルにして内容を……。

○吉野英岐部会長　小見出しみたいにして。

○若菜千穂副部会長　③については、恐らくこれ時系列変化を見ているということであれば、③を②にして時系列変化と書いて内容をここに書く。そうしたとき、この 16 ページの④の部分なのですけれども、これ素直にいくと想像される要因というか、変化について想像される要因ということで、この属性はこうだからというところを抜き出した方がよくて、そのときにはそれであれば多分その他世帯ではない何か変化、この時系列変化で触れているところについて、要因を多少分析できるものについてさらっと書く、その次にこの後見ると低位なものを抜き出している項目があるので、低位なものについて注目したいのであれば④にして、低位が続いているものについてみたいな小見出しにして、そこについて触れる。低位がない項目については④はなしでもいいとか、そういう見出しを整理した上で、先ほどティー先生がおっしゃったように、想定される要因、これ分かるのではないか、それであれば載せようという、その議論をここでされた方がいいかなと、まず小見出しをつけた上で議論しないと、何だか議論しづらいなと思います。

もう一つすごく細かいことを言わせてもらうと、要因分析のところで例えば 15 ページの一番上で政策分野書いて、分野別実感書いて、健康・余暇分野、心身の健康と書いてあるのですけれども、できれば心身の健康と書いて、この政策分野について後ろで括弧で書いてもらったほうが、目に飛び込んでくるのが何だか余暇と書いて心身、これはすごく細かい話で申し訳ないのですけれども、これは分野別実感を分析しているところなので、心身の健康の実感で（１）、健康・余暇分野という書き方のほうが私は見やすいです。

○吉野英岐部会長　という御提案がありましたが、いかがですか。

○池田政策企画課主任主査　小見出しをつけるということは、おっしゃるとおり書いているときに、見直しはしながら書いていたので、お話のとおりだと思います。そこのところは整理したいと思います。

○山田佳奈委員　私も細かいところの表記の仕方のところも含めてと思っていました。

今の心身の健康のところで、これは全体に渡ってなのですけれども、質問肢を入れていただいた方が分かりやすいかなという気がしていました。というのは、前のところは設問が、「あなたが幸福かどうかを判断する際に重視した事項は何ですか」と、ちゃんと明記されているので、こちらの書き出ししているものについては、それに触れた方が、読んでいる方からすると分かりやすいのではないかなと思っていました。

それと例えば今ですと 10 ページのお話にあった④のところで、私も「その他」というのは事実的には書いていいのではないかとは思いますけれども、一方で若菜委員さんがおっしゃったような、ここで何を言うかというところは別途の議論が必要だなと思っています。それは一つには補足調査をどう使うかということです。「その他」世帯のところだけではなくて、例えばこの間、若菜委員さんがおっしゃったことについて、私も同じ印象を持ったのですけれども、例えばこの個別の要因のところの差を見ていくとか…。そうなってくると恐らく補足調査の場合は統計的にどれぐらい取れるか、どこまで言えるかというのは正直難しいところがあって、これはやむを得ないところもあるかもしれません。

ただ、一方で補足調査をやっているわけなので、それをどう反映させるか。

統計的に言える範囲はここまで。だけれども、ここからは補足調査をやるときに何がここで言えるかというのは別立てで、例えばコラムではないですけれども、別の枠組みをつくって入れるということがあってもいいのではないかなと考えたところです。そうでないと、何か補足調査の意味合いというのが薄くなってしまうかなという気がしていました。

あと文言的なところで、ここは皆様の御意見お聞きしたいところなのですけれども、回答した理由から以下の要因が推測されますということで書いていただいているのですけれども、ここだけ見ているときに以下の要因が強く関わっていることが推測されます、といった、結局そういうことなのではないかなという気がしていているのです。ここは本当に文言だけの話で、これでそのまま伝わるところと文章がここだけ見たときに取りにくいところがあるかなと思ったので、申し上げます。

○吉野英岐部会長　今のことについてはいかがですか。

○池田政策企画課主任主査　時系列分析のところについては、低下のところでは整理を基本的に、第１回の資料の７というのがそれに当たると私は思っているのですけれども、各属性のところの低下の状況を見て統計的な検定によって要因が探れないかどうかという作業をしています。そこの中で、残念ながら、なかなかそういった要因が整理できなかったというところもありますけれども、今のお話はそういう作業をほかの分野でもやるという理解です。

○山田佳奈委員　ですから、落としどころをどこに持っていくかなという、そこになってくるのです。例えば統計的にはこうでしたということで、淡々と終わるという方法もあるかもしれない。それが一番非常にニュートラルなやり方だと思うのですけれども、一方で補足調査をやって、割とこれで県民意識調査だけでは分からないところを補足調査で見ましょうねと言っていたところで上昇した分野が一方で県民意識調査で上昇した分野があることを補足調査でどう説明をそこでしますか、しませんかというのをこの部会でジャッジしないとならないだろうなというところになるのです。

ですので、例えば、在り方としては、これは本当にどちらかというと質的な見方になっていくと思っていて、難しい側面はあると思うのですけれども、統計的に有意かどうかというのとは別の、例えばこの今回資料２、資料３でお示しいただいたような、こういう要因が、例えば感じていない、感じている人との、若菜委員さんが言っていましたような、その違いであるとか、あるいはここから見えることは何かという、何か一言入れるかどうか、これは大変になるのですけれども、この辺は皆さんの御意見いただきたいと思います。

○吉野英岐部会長　本当は要因まで県民意識調査、5,000 人調査で分かればいいのですけれども、最初の委員会でもあったとおりなかなか県民意識調査のデータだけでは、なぜ下がったのか、なぜ上がったのか、なぜ横ばいなのか、あるいはなぜあるところだけのカテゴリーが下がるのかということについては、ティー先生がいろいろ努力してくれましたが、分かりづらいというか、はっきり見えない。唯一災害でしたっけ、県北・沿岸が下がっているのは、ほかのところと関連させてみるとやっぱり台風等々の災害が多かったということによるものではないかということは言えたけれども、ほかはなかなか言えないということなので、補足調査で下がった人たちの中から理由として上位に上がっている３つと考えるのですかね、これね。多くの人がこういう意見だという、より多くの人ですね、今３つほど挙げてもらっていますと。

だから、補足調査と県民意識調査をリンクさせて、落ちている人たちの心の中を補足調査でもって推測するとこういった要因が挙げられていたと、この委員会がそれを本当に要因として採用するのか、あくまでも補足調査の中で上位項目はこういうものでありましたということで書いてとどめるかと。今回は以下の要因が推測されますという書き方が多いので、補足調査の上位３項目で一応要因ではないかなというところまで委員会としては見解を示しているのだけれども、補足調査の中で上位項目はこの３つであると。あとは認めてしまえば、それはあくまでも補足調査の結果を言っているだけで、踏み込んでこの委員会として解釈を出したというところまでには至らない、その辺の立ち位置をどこまで踏み込むかということですよね、きっとね。この推測されますというのがどれだけ強い推測なのですかと、もうほぼ当たりということですかねと、それとも補足調査の上位項目にこういった項目があるということを、一応言っていることが大事ですよと。どうですかね。

○池田政策企画課主任主査　今回記載している中でお話の点については、私どもも検討しているのですけれども、いずれ今回記載している中身については、エビデンスというか、きちんとしたバックボーンの下で入れるところまでしか書けないということで書いてござ

いますので、委員の皆さんお話のとおり基本的には結果、補足調査の回答から推測するとこういう形になりますというのがここの文章としては現実的にはそうなっていると。今回この部会の中でお諮りして、皆様の御意見を踏まえた上でどういう形になるかなということでの御提案という資料でございます。

○若菜千穂副部会長　私もせっかくなので、補足調査をもう使った方がいいと思っていて、これは使い方としてこのストーリーでいくのであれば上昇しました、さらに一番上昇しているのは、これは 30 代の人ですよね、0.3 というのは。一番増えているのは 30 代で、補足調査で、では 30 代で増えている人で一番選んだのはどれですかで、ではこれとこれとこれですという補足調査、30 代の人の上がっている人のナンバー１、２、３を補足調査で入れる、そういう使い方で、委員が恣意的に選ぶとかはできないので、そういうふうに補足調査使われたら私はいいのではないかと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長　低位のところを使うよりは、せっかく上がっているというところなのだから……。

○若菜千穂副部会長　余暇については上がっているという取上げ方なので、一番上がっているところのこの 30 代の、この上がっている要因を補足調査から見ると、これとこれとこれを選んだ人が多かったですと。では、下がっているところについては一番下がっているのはこの属性で、この属性の人たちは補足調査で一番下がっていると選んだ人はこれとこれを選んでいました。だから、普通に素直にするとそういうことなのではないかと。

○池田政策企画課主任主査　それを整理することは可能だと思いますし、今のお話だと基本的には全体のトレンドとして上がっているものについては、上がったものを選択してという整理で……。

○若菜千穂副部会長　余暇は上がっていますねという整理ですよね。

○池田政策企画課主任主査　余暇は下がっていて、心身の健康が上がっています。

○若菜千穂副部会長　すみません、心身は上がっているから、上がっている要因は何だろうかと、一番上がっている属性の人が選んでいるものを見たらという。

○池田政策企画課主任主査　そうすると、この③の後ろの続きに、③の続きとして、この中で特に上昇している 30 代については実感が上がった方々の要因を書いていくような形というのを整理という趣旨でよろしいでしょうか。

○若菜千穂副部会長　では、この小見出しを①、単年度の属性、②、時系列の変化、③、変化した要因、④、低位なものについてとか、そういう小見出しでいって、③の変化した要因については補足調査をもう少し見たと、そう淡々と描かれた方が説得力はあるかなと。

○ティー・キャン・ヘーン委員　９ページ、今は９ページを使って、表２を使って記述しようとしているということなのですよね。若菜委員の話だと、この９ページの中で、さらに例えば 30 代の人が実感の上昇した回答を抽出するということなので、危惧したのは、人数がいるかなと。回答者がいるかどうか気になりました。

○池田政策企画課主任主査　今日の資料３に年齢別の補足調査の結果を入れています。「からだの健康が１番最初で、「こころの健康」が９ページに記載をしているというものになります。ここが上昇しているということになりますが、ただ、ここはあくまでも単純集計なので、実感が変動した人がどれぐらいになるかというと、多分これよりもずっと少なくなってくるかなというところはありますが、確認はさせていただきます。

○吉野英岐部会長　少ないよね、サンプル。

○和川特任准教授　たしか前回の議論でサンプル数が少なくなるので、変化まで追うのは無理だろうと、なのでやるとしてもこの今出ている資料３の低い人、横ばい、高い人までが限界だよねということで資料３が出たのではなかったかなと理解をしています。

○若菜千穂副部会長　基本的にはそれでいいです。いいですけれども、報告書の書きぶりとして時系列変化で一番大きい変化は 30 代ですねと、そこまで触れるじゃないですか。なので、それも何で 30 代はこんなに上がっているのだろうというのを見たくなるよねというぐらいです。そこには多少文章上ですよ、これは定性、定量的な分析はできないということなので、文章としては 30 代ね、ほかと比べるとすごく増えている。なぜなのだろうと見たくなるから、触れたらぐらいです。30 代だけ触れるというのではなく、この９ページで触れた項目で触れていいのですけれども、特に上がった 30 代はどこだろうかというのは人情としては見たいかなと。

○吉野英岐部会長　見たいですよね。

○若菜千穂副部会長　ぜひ一言一文ぐらい触れていただいたら、さらに説得力、補足調査しっかりしているなと、思ってもらえるかなと。それぐらいのもので。でも、そう使われるといいかな。

○吉野英岐部会長　これは 5,000 人調査では上がっているのでね、600 人調査で 30 代特有の動きがどうか分からないし、ただサンプル小さいから、本当かどうか分からない。

○吉野英岐部会長　そこで、本当は若菜委員の解釈とかあるとすごく、合っているかどうか分からないから。

○若菜千穂副部会長　多分それを狙っていると思うのですけれども、委員がこう言ったみ

たいに、そうはいかないですよ。

○吉野英岐部会長　委員の専門から見て、専門家の御意見みたいなのが……。

○若菜千穂副部会長　48 歳、子供２人の女性はこう言ったと、そうはいかないです。特殊です、私は。

○吉野英岐部会長　何のために委員にいるのだと言われてしまうからね、委員はただ数字を見ているだけではなくて、専門家として解釈ができる人たちが入っているのですよねと言われると、そうとも言えますけれどもという苦しいところです。

だから、本当にエビデンスの非常に高い、いいお答えになるかどうかは委員自身もよく分からない。テレビのコメンテーターぐらいではいいのかもしれないのですけれども、残る文書に正確な、確実なことを載せるというのは相当難しいのがあって、確かに 30 代がぽんと伸びていますねというところまでは言えるし、何でなのでしょうねというのは言えるけれども、確かにそれを的確に分析するというのは今年は難しいかなと、まだデータが１年しかないし、特に 600 人調査がね。30 代に限定しないでいいのだったら、伸びた人の意見はこうでしたというのは書ける。それは別に嘘でもない、伸びた人の上位の３つの意見はこうでしたと。それが 30 代に当てはまるのかどうかは分からないけれども、600 人調査、補足調査の中からこの分野で伸びたというか、平均点が上がった人たちの御意見をここで紹介はできるかもしれない。それはしてもいい、それはぎりぎり掠るかなと。ただ、それはいろいろ注釈をつけてそう言うしかないですね。ここは別に 30 代に特化した意見ではないけれども、補足調査から出てきている上昇要因はこういうものがありましたと書くくらいですね。

○若菜千穂副部会長　それはぜひ書いてほしいな。

○吉野英岐部会長　そうすれば、その後の推測にもつながる可能性はあるということですかね。確かに流れとしては上昇しているのに低い人たちの話しかしないというのは何のために上昇しているのを出すのだと言われる可能性がある、上がっているなら上がっていると、その要因をちゃんと言ってくれよというのが読み手の意見としてはそうかもしれないですね。

○池田政策企画課主任主査　そうすると、低下の方をこれから御説明するのですけれども、それと同じような流れをこの中にも入れていくというくらいの理解でよろしければ。

○吉野英岐部会長　うん、３つこういった意見が見られましたでいいんじゃないかな。そういうまとめ方でやってみたらどうでしょうか。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　あとは横ばいはまた難しくて……。

○谷藤邦基委員　確認ですけれども、16 ページの④は削除するということでいいのですね。世帯構成、その他についてはいろんな属性が混在している可能性があるので、分析が難しい、ないしは分析する意味がないからレポートには載せないという理解でいいのですね。

○吉野英岐部会長　はい。

○谷藤邦基委員　そこまでは私も同意します。問題は、レポートには載せなくてもいいとしても、ここは無視してはいけない問題だと思うのです。何か問題が隠れている可能性があって、そのサインが出ているのだと思うのです。

資料４を見たときに世帯構成、その他のところは結構ネガティブな色がついているわけですよ。

○吉野英岐部会長　全体的に。

○谷藤邦基委員　　そうです。それで、これ確かに分析しようがありません。だから、レポートには載せないで私もいいと思うのだけれども、無視していいわけではない。ここに何か問題が隠れていないかどうかを探求するというのは来年度以降の調査の中では工夫が必要だと思います。具体的にもう少し小見出しとか細かく分けて属性を炙り出すとかして、何か隠れている可能性がある。そのサインが出ている可能性があるというふうに理解していただく必要もあるのかなと思いました。

変な話ですけれども、経済統計でサービス業でその他のその他問題というのが昔から言われていて、新しい産業というのはその他のその他から出ている。そこをちゃんと見ていかないと、次の世の中が見えませんよというのはよく言われていることで、これは観点が違う話ですけれども、でもその他だから分析できませんというのはそのとおりなのだけれども、だから無視していいということにはならないと思うので、そこは一工夫、次の調査の中で考えていただきたいと思います。以上です。

○池田政策企画課主任主査　10 月の部会では、来年の補足調査をどうしていきましょうかというところもぜひ御相談を、御議論いただきたいと思っていましたので、今回の検討の中で課題を整理させていただいて、御意見いただきながら、そこで御検討させていただければと思っています。

○吉野英岐部会長　では、これは留意事項として委員会でも覚えておくと。

○若菜千穂副部会長　すばらしい、そのとおりですね。そうだと思うのです。アンケートをやっていて多いのは、実は兄弟世帯が多いのです、最近。

○吉野英岐部会長　姉妹とか。

○若菜千穂副部会長　そうですね。２人とも結婚しないので、お互いが支え合うのです。なので、確かにもうここその問題はすごく重要で、こういう属性、捉え方で世帯構成はいいのかという話ですよね、393 でひとり暮らしより多いと。

○吉野英岐部会長　ひとり暮らしより多い。

○若菜千穂副部会長　さらにこのその他を分類する必要があって、分類のためのアンケートをやってみると、おじ、おばとかも本当は多いのです。すばらしいです。

○吉野英岐部会長　踏み込んだ解釈が難しいけれども、ここに何か芽が隠れている可能性もないわけではないということです。カテゴリーを細かくするとか、例示を出すとか、本当にその他のその他をもう一個つくるとか､本来の合計がその他になればいいのだからと。それは留意事項でやりましょう。ありがとうございました。

それから、横ばいは、まずは書き方ね、確かにね、（１）の間にⅡが来るとどっちが上なのだよということもいけないので、確かに（１）の間はすぐ家族関係の実感として、一番最後にまた括弧をつけて、それはⅡの家族・子育て分野にあるのですよと言えば、あまり違和感ないかもしれないですね。

ローマ数字が偉いので、何で偉いのが後ろにいるのだと言われてしまうかもしれないというか、上位、より大きな包括的なカテゴリーでしょうと、このローマはね。というような違和感が出てくるということをおっしゃったのではないかと思います。

まずは、家族関係なのだけれども、これは横ばい、それで分散分析やると幾つかで特徴が出ていますと。なんだけれども、経年変化を見てもｔ検定の結果はやっぱり有意な変化が見られた属性がないので、ここは踏み込みません。③で終わり、個別に見てもあまり面白いデータはないとは書いていませんが、そういうことなので、③で打切りということですね、④も⑤もないよと、よければここで、非常に高いのですね、家族関係、実感がね。そこだけは意味があるけれども、個別にクロスみたいにかけてもあまり出てこない。何でこんなに高いのかと言われる意味はあるかもしれないけれども、それはまた別問題。子育ては、逆に低いのですよね、ここ。横ばいなのだけれども、家族関係に比べるとかなりポイントは低くて、家族関係は 3.86 なのに子育ては 3.07 ですか、すれすれということですよね。子育ては①、②、③とやって④、つまりこれは低位、低位が先に入ってしまっていますね、低位の前にあれですか、③で 30 代の実感が有意に低下しているということがまず書かれていますね、17 ページね。これも要因分析はしないのでしたっけ。

○池田政策企画課主任主査　基本的には分野別実感の変動を分析する場なので、ここの場で 30 代の低下のみを属性を分析することにあまり有意性がないのかなということです。

○吉野英岐部会長　なるほど。その分、逆に④が随分と長くなってしまうのですよね。

○池田政策企画課主任主査　こちらは残念ながら低値で推移してきたものがいっぱいあったということで、どうしても記載が増えているということです。

○吉野英岐部会長　うん、何か見た目だと④が大事だとすごく見える、文量的にも。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、ただここは「その他世帯」は少なくとも削除ですし、あと先程もお話したのですが、「分からない」というような理由をここでどのように取り扱うかというところはあろうかと思います。

○吉野英岐部会長　分からないが多いと。

○池田政策企画課主任主査　例えば「ひとり暮らし」の理由で分からないとかがあるのですが、身近に子供がいない、子育てに関わっていないという方が分からないと答えていることに対して、ここで分析という形で要因として載せる意味があるかどうか。

○吉野英岐部会長　要するに、低い理由を見るとこういった形態の家族で継続して低い。その答えがこれですと。低位のままというのが問題ですので、かなり分析を入れてみましたという感じですかね。

横ばいではあるのだけれどもと。横ばいの中でも、特に子育てが落ちているとまでは言えないのかな、言ってはいけないのかな、0.22 マイナス。ただ、分野の中の分野ということだし、さらに特定の年代しか出てこないから、ここは分析とは言えない。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、いずれ今回のところについては分野としての実感が変動しているときにその理由を探るということですので、当然横ばいではあるけれども、課題がないわけではないとは思いますので、それはこの統計の中で今回低値で推移しているところを分析いただいているというのは、そういった意味合いなのだろうと思っております。

○吉野英岐部会長　小見出しに書いて、その他世帯を抜いてみると、「ひとり暮らし」というのは子育てしている世帯ではないということですかね。当事者ではないと。

○谷藤邦基委員　ないですよね。

○吉野英岐部会長　ひとり暮らしの人はこう思うというくらい。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、「ひとり暮らし」である方が答えた結果がこうなっていると。

○吉野英岐部会長　何か不思議な意味、実感論ではないですよね、こうじゃないかなと。

○池田政策企画課主任主査　子育てが終わった方ということもあり得るかとは思います。おひとりで暮らされている子育ての終わられた方の御回答として入ってきているということは否めないのかなというふうには思っています。

○吉野英岐部会長　表９というのは当事者に近いですね、これかなり 30 から 39 歳というのは女性、男性が書いていないから分からないけれども、当事者世代なのでしょうね。あとは､分析かけていろいろ出てきたので､ひとり暮らしとか子供がいない人とかといって、現状の当事者とは認識しづらい人たちの御意見ではこういう意見でしたということですよね。確かに低位のままになっているのだけれどもと。その説得力がどれだけあるかというか、当事者に聞かないで、終わった人やこれから当事者になる人たちの意見が低いからということで、先に出てきているようにも見えるのだけれども。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、あと一部単身赴任者が入っているとか。

○吉野英岐部会長　ひとり暮らしに。例えば表 10 で低位で推移している人の、18 ページで 20 歳から 29 歳も低いままということですか、これ。これは、だから当事者性がある、比較的。

○池田政策企画課主任主査　そうだと思います。なので、内容も支援サービスの内容ですとか。

○吉野英岐部会長　例えば４つ全部並べてくれたのだけれども、全部書いてもいいのですけれども、４つあるうち１つ特出しすれば 20 歳から 29 歳の意見ではという書き方もあるのかなと。

○池田政策企画課主任主査　そこはまさにこの部会の中で御判断いただく内容だと思っております。我々とすれば、全てお見せしているという形になりますので、この中で例えば先程のように「その他世帯」は不要だというようなご判断もあろうかと思います。

○吉野英岐部会長　その他は分析するだけで外したのはいいのだけれども、当事者性が強く出そうな項目については、まずは 20 歳から 29 歳の意見がこうだったという方が重そうな気がするのですけれども。

○池田政策企画課主任主査　実際のここの分野の実感が低くなっている理由として、主に考えられるのはこの 20 代の理由を引っ張ってくるというのは当然考え方としてはあるかと思います。

○吉野英岐部会長　４つのカテゴリーで低位に推移していたということは、まず言って構わない、そのとおりなのだから。ただし、分析はそのうち 20 歳から 29 歳にかけての声を拾ってみましたという方が何となく全体的には重みづけがあるようにも見えるのですけれ

ども、御意見いかがですか。

○山田佳奈委員　私も賛成なのですけれども、同時に資料３の年齢別で、先ほど 30 歳代が有意に低下したというところと、こちらが気になっていたところで、今回の資料３の年齢別で両方見ていただいているのは、これ非常に重要ではないかなと思って拝見したのですけれども、資料３でいくと多分 20 から 29 歳で 37 ページからですか、30 から 39 歳が 39 ページで、その後ひとり暮らしということでいくと、これ中を見ていくと結構違いがあるのですよね、何を理由に強いものと考えているかというのは、傾向かなり違う感じがしますので、今吉野先生おっしゃったところに加えていただくとすると 30 から 39 歳もあった方がよろしいのかなという気がしていました。

○ティー・キャン・ヘーン委員　繰り返しになりますけれども、ここは単純集計であって、実感が下がったではないので、その実感が本当に下がったかどうかはさらに抽出して、そこで本当に、さっきの一番最初の１に戻ってしまうのですけれども、そういう人数がいるかどうか、抽出してみないと分からないというところなのです。だから、ここはあくまでも単純集計です。

○山田佳奈委員　あくまでも変化の要因までは言えないかもしれないけれどもという、ただ何かは、何に皆さんが関心を持っているかということを出さないとならないのではないかという、それだけなのです。ですので、有意として言える、あるいはこれは有意とは言えないかもしれないという、先ほどの話と一緒なのですが、少なくともこの世代の方たちも人数が少ないから何ともいえないのだけれども、ここをある程度の上位、少なくとも３つ、４つとか、これらの感じにくい方たちは何に関心を持っているのか、何を要因としてやっているか。特に私が気になっていたのが詳細のところでいくと９番目の勤め先の子育てに対する理解とか、ここら辺というのは結構違うのですよね、感じる人と感じない方というのは。というところですとか、切り分けだけすればいいんじゃないかなと、説明だけですね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　すみません、20 から 29 歳は、これは肯定的な回答なのです。要するに、９番の 57.1％というのは勤め先はそういう理解があるということになっていて、それは 30 から 39 歳も同じような気がするのですけれども、それと今回の 30 から 39 歳の実感が低下したというので、勤め先に対する理解はあるというのを理由として挙げるということですか。ではなくて。

○山田佳奈委員　変化の要因というのをこれで言うのは無理だろうと。少なくとも変化ということなので、切り分けというのはそれで、少なくとも変化としてどうなったかという話はそこで終わる。そこまで言えるところは一度区切って、だけれども、ではこの 20 歳代、30 歳代をどのように分析しますかと、我々は。要は、これ政策としてどういうことに着目したら、こうしたらいいのではないですかという、どういう人たちがどういうことに関心を持っていますかということを示す必要があるものですよね、基本的に。

○ティー・キャン・ヘーン委員　ここを見ればいいという話ですか、勤め先の理解が重要ですよという。

○山田佳奈委員　そうですね、まあ、そう言っていいのかなと。だから、私はそこは若干、あくまでも気にはなると。

○吉野英岐部会長　これ 39 ページの資料３の資料というのは、30 歳から 39 歳だけ抜いているという意味ですか。

○池田政策企画課主任主査　はい、そうです。

○吉野英岐部会長　そして、「あまり感じない・感じない」と「どちらともいえない」、「感じる・やや感じる」で一番右側の「感じる・やや感じる」というのは、これ肯定的な評価ということですか。

○ティー・キャン・ヘーン委員　そうです。

○吉野英岐部会長　むしろ、これ１回しか調査やっていないから上がり下がり分からないけれども、否定的な評価をしている人は左側に来ているわけですね、感じないと。そこにどんと来ているのは費用、それから就業状況、３番はまた費用が非常に負担感があるということですかね、感じない人たちの中では。

○池田政策企画課主任主査　そうです。

○吉野英岐部会長　ただ、それは経年変化を説明するものではない、確かに。この補足調査は１地点しかないので、経年変化は説明できない。ただ、そのある時点において感じなかった人はこういうことを考えているという意味ですよね。

○池田政策企画課主任主査　そうです。今年調査したときの回答者、昨年も回答した人の実感としてはそういう意見があったということです。

○ティー・キャン・ヘーン委員　ここからさらに、例えば本当に実感が下がった人の意見を抽出しようと思ったら、これ六十何人しかいないので、さらにそれができるか分からないですね。

○山田佳奈委員　多分難しいですよね。ですので、繰り返しになってしまいますけれども、要因分析の……。

○吉野英岐部会長　要因までは言えないのだけれども、でも関連するような意見として補

足調査における否定的なというか、感じない人たちの意見にはこういうものがありましたと、ぎりぎりそこぐらいまでは書いてもいい。それは要因とまでは言っていないけれども、同じ30代の中で声を拾うとこういったものが上位に、特に評価の低い人たちに対してはこういう意見が多かったですと。そこまで入れるかどうか。入れると物語性は出るのだけれども、そのエビデンスの強さ、弱さというと直接エビデンスにはなっていない。

○山田佳奈委員　変化のエビデンスにはならない、なれない。

○池田政策企画課主任主査　今のストーリーでいくと恐らくこれから低下したところを書いていくと、そこの属性についてすべて記載するということでしょうか。

○吉野英岐部会長　いっぱい低下しているか。

○池田政策企画課主任主査　ええ、それを今のようなことを全て書いていくのかどうか、実際にレポートの書きぶりということになってくると思うのですけれども。基本的には分野の実感を変動要因としてどう説明できるかというところがまず整理をいただいた上で、そういったものをどこまで記載していくかという議論だと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長　だから、後ろも一個一個説明しないといけないということですね、この下がっているところ。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、あくまでも1回目の資料の中でお示ししたようにこのような変化がありましたということと、あとその中から見えるものがあればそこできちんと説明していくというような流れで整理しています。

○吉野英岐部会長　これは政治的な判断と言っては変ですけれども、例えば子育てのところが低い、ずっと動かないのと、それから30代が下がっている、全体的には横ばいなのだけれどもということですね。これがどれだけ取り上げる意義があるかということですよね、これレポートにね。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、レポートの流れからすると、基本的には分野別実感の変動について分析していただくこととしておりますので、まずはそこについて御検討いただきたいとは思います。

○吉野英岐部会長　とどめておけばいいと。

○池田政策企画課主任主査　ということになると思います。このレポートは全部局に提供することにはなるので、各政策を担当する部局の問題認識の中にこういったものが当然入ってくると思っています。その中で、彼らがどういう課題を抽出して、その中でどういう政策を打っていくのかについてこれから検討していくための基礎資料としては活用される

ものと認識しております。

○吉野英岐部会長　子育てというのは、さっき申し上げたように当事者性が非常に強いところで、関係ない人にはほとんど関係ないというか、そうですかというような分野が１個と、もう一個は岩手県の政策として過去推してなかったですか、子育て日本一とか言っていた覚えはないでしたか。何か聞いたことがあるのですけれども、そんなことは言ってないといえばそれでいいのですけれども。

○若菜千穂副部会長　レポートには、これは載せるのですか。

○池田政策企画課主任主査　今回の年次レポートですか。

○若菜千穂副部会長　はい。

○池田政策企画課主任主査　年次レポートの中では、それを入れるというお話が冒頭にあったので、どういう形で差すかも含めて次までの宿題かなと私は思っていたところです。

○若菜千穂副部会長　少なくとも 30 代の子育ては差は有意と出ているので、これは触れるべきだと思います。

○吉野英岐部会長　全体的にはクロスの分析はしないんじゃない、分野の分析をすると。

○ティー・キャン・ヘーン委員　分野のクロス、例えば。

○吉野英岐部会長　下がった分野ですよね、今回経年変化で下がった分野が５つ、６つでしたっけ、そこは重点的に分析しますよと。でも、さっき言った子育てのところというのは全体的に横ばいなのです。だから、本来であればあまり分析はかけない。最初はなかったのです。だけれども、大事なのかどうかということなのです。

○若菜千穂副部会長　これで言うところのあれですね、県計の部分で取り上げるという議論で、前回お願いして、この属性別を出していただいたのですけれども、私はこれをレポートにつけるべきだと思うのですけれども、ここで既に統計的に有意と、青色が出ている以上、やっぱり私は触れるべきだと思いますけれども、これ県計しか見ませんという、そういう議論ではなく、ここ青出ているのだから、統計的に有意と言われているのだから、触れたらという気がしているのですけれども。

○池田政策企画課主任主査　載せることついて事務局側として異論はないのですが、あくまでも、この部会の目的としては、この分野別の実感平均点が有意に上がったり下がったりしているものの変動要因を探るということになっているので、横ばいとして、当然各分野の中で属性として下がるものはあろうかとは思いますが、それが今回の例えば横ばいに

対して効いてきたのかどうなのかということ、議論になると多分違ってくると思うので、そこのところに触れるということはやぶさかではないのですが、そうなってくると多分下降しているところについて全て触れなければならなくなる、今までですと青のところを全部触れるとなると、上昇しているところも入れると緑も入ってくるので、それらを全部触れるとなるとかなりの量になってきます。

○若菜千穂副部会長　そういうことであれば、全体的な構成なのですけれども、上昇と低下について触れますよね、私は目次として今２の１で上昇に触れて、２の２で横ばいに触れています。それであれば、２の３の低下を２の２に持っていった方がいい。そもそも触れたかったのは低下ですよね。

○池田政策企画課主任主査　そうです。

○若菜千穂副部会長　それであれば、最初から緑にして低下してしまえばいいと私は思うのですけれども、２の１低下、２の２上昇、２の３はもう補足的なものですよね、横ばいについては私もそんなに多く触れなくてもいいと思うのですけれども、横ばいについては基本的に触れないのですけれども、ただこれを見たときに家族関係はほぼ変動がない。ただ、子育てについては県計全体で見ると変位はないけれども、まず属性で見ると 30 代で有意に下がっている、これについてはこうだと。さらに黄色の部分も触れたいのであれば、さらに子育てと子供の教育については低位で推移していると。これについてはこういうことが考えられるぐらいな補足的な触れ方、横ばいについてはそういうトピック的な触れ方でいいと思います。それであれば最後、後ろに持っていくと、そういう触れ方のストーリーのほうが私は読みやすい。

○池田政策企画課主任主査　今のお話は、例えば全部書けるかはともかくとして、「子育て」のところだと、さっきも「心身の健康」で 0.3 上がった属性がありましたけれども、例えば歴史・文化だと 0.38、学生その他とか出ているのですけれども、そういう特異的なところは例示的に入れていくようなイメージ。

○若菜千穂副部会長　横ばいについては、特に低下した属性と低位で推移している属性についてのみ触れますみたいな。

○池田政策企画課主任主査　という整理ですね。

○吉野英岐部会長　そうすれば何とかこの 30 代が触れられますので。低位かつ有意であれば、歴史・文化は外せますから、横ばいでも。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、そういったような整理を検討してみます。

○吉野英岐部会長　子育ての当事者性が強くて、ここをパスして本当にいいのかどうか、

県民の幸福を考えているという大前提に立ったときに、確かにどれが重くてどれが軽いというのはそう軽々しくは言えませんが、少子化とか人口減少とかということが県全体の課題になっている中で、子育てで有意に低下が見られる項目については全体が横ばいだから、今回触れませんでしたというので、県民が納得するか。何となく私は子育て日本一とどこかの知事さんがおっしゃっていたような記憶があるのです。

○山田佳奈委員　子育てと子供の教育というのは、確かに平均値よりは高いのですけれども、3.09 というのは決して高いわけではないです。

○ティー・キャン・ヘーン委員　高くないです、ぎりぎり。

○池田政策企画課主任主査　お話のとおり、今回、前回の御議論の中で低値で推移する属性について検討することで、20 代の属性の意見も見えてきて、子育て世代の要因を書けるようになったことはお話のとおりだと思いますので、今のお話を受けてそのような修正にさせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長　後ろに持っていってもいいですのでね、分野で落ちている方が大事なのだから、分野で落ちているのは真ん中に持ってきて、その中で最後に横ばいのものを固めておけば、確かにクライマックスが後ろにあるよりは、まず１個上がっているものをぽんと出して、落ちているものはぽんと６個ぐらい出てきて、あと最後どっちともならない、横ばいというものについて幾つかトピック的に触れるとこういうものが出てきますよと。ただ、その中にも重要な要素が隠れていると思うのです。一見横ばいに見えるけれども、これはやっぱり関係ない人の意見がばんばん入ってしまうと横ばいになってしまうと。だけれども、本当に当事者として御苦労されている人から見れば、これはなかなか状況はよくなりませんよというような御意見があるのかもしれないけれども、全体が薄まってしまったら、それは見えてこないとか、いろんな要因はあるのですけれども、何とも正確に全部言い当てるわけにはいかないので、一番最後で 30 代の子育て世代の要因についてずばり、これもさらにずばり答えられないので、補足調査を少し紐解くとこういった御意見が見られたというふうに、さらにそこから想像してくださいという、もっとデータが蓄積できればこちらももう正確なことを言えると思うのですけれども、何せまだ１回目なので、データの蓄積が少ないので、そこまでにとどめておきますけれどもと、決して無視していいようなものではないというぐらいにしましょうか。

　次は子供の教育でいいですか、さっき私は子育てのほかのところはあまり要らないんじゃないかと、分析が。全部入れるとなくなりますよね、どんどん。少なくともその他の世帯構成は要らないのと、子供がいない人にあまり聞いても、聞く相手が違うんじゃないのと言われそうな気が。

○谷藤邦基委員　この資料４から見る限り、子育てのところで見るべきは、年代のところと、職業の常用雇用者のところぐらいでいいと思う。あとは多分そんなにケアしなくても大丈夫。

○吉野英岐部会長　ケアしなくてもいいと。という御意見を入れてみて、機械的に全部低いから一応全部やりましたというのは今回池田さんが出してくださいましたけれども。

○池田政策企画課主任主査　今のお話、17 ページのところで、もう一回 17 ページの④については、継続的に低いものを一応全て挙げはしますが、そこの中で 20 代に注目してこういった理由が推測されますみたいな形で整理をさせていただくということでよろしいですか。

○谷藤邦基委員　その程度でいいと思います。

○吉野英岐部会長　では、それで進めてください。子供の教育も横ばいで、分散分析を見るとこういった結果が出ていますが②。だけれども、ｔ検定では有意な変化がないので、全体調査では要因が分析し切れない。ここは子供の教育は分散分析でも特段青が出ないのですよね、一覧表で見ても。だから、どこかに絞って言わなくてもいいといえば言わなくてもいいから、低位だけを見ていくと 20 から 29 歳、子供がいない、10 年未満のところにおいてずっと低い値で動いているので、この３つについて意見を拾ってみました。だけれども、どうでしょうか、全部載せておきますか、ここ。当事者ではない人もいるけれども、居住年数が未満というのは、これは年齢とリンクするのですか、しないですか。

○谷藤邦基委員　転勤族なのではないかと私は思いますけれどもね。

○吉野英岐部会長　なるほど。

○谷藤邦基委員　転勤族の人たちというのは、結構いろんな意味でレベルが高い人たちなので、子供の教育とか、あるいは進学先なんかでも要求する水準が高いという傾向があるようです。

○吉野英岐部会長　一言、二言ある方々ばかり。

○若菜千穂副部会長　居住年数 10 年未満は面白いですね、自然が豊かで余暇もあるけれども、やっぱり教育はみたいな感じがする。

○吉野英岐部会長　では、載せておきますか、特に排除する必要がなければ載せておいても構わないと思います。

次の住まいの快適さについても横ばいで、分散分析ではこんな感じで、ｔ検定では男性で有意。男性だけ感じると。

○若菜千穂副部会長　男の人気にしているんだなと。

○吉野英岐部会長　0.09 だからぎりぎりぐらいな感じですけれども。あとは低位ではないですね、ここはね。だから、低位という項目はない、3.29 あるから。男が低いというのは何か理由あるのですか、分からないですね、快適度の感覚が違うのか。

○若菜千穂副部会長　私は給料に引っ張られるのかなと、ここは。

○吉野英岐部会長　住まいの快適さ。急に住まいが悪くなるということもないので。

○若菜千穂副部会長　やっぱりローンがとか。

○吉野英岐部会長　そういう意味ですか。

○若菜千穂副部会長　違うかな。

○吉野英岐部会長　快適さというのは広いとか、暖かいとか、明るいとか、近いとか。

○若菜千穂副部会長　だから、そういう意味で補足調査でどれを選んでいるかを補足的に見たらどうかなと。

○吉野英岐部会長　補足調査のこの住まいの快適さのお答えというのはあるのでしたか。

○池田政策企画課主任主査　すみません、そこは抜け落ちていました。

○吉野英岐部会長　抜けていると、そうか、そうか。

○若菜千穂副部会長　そこで類推するしかないかな。

○吉野英岐部会長　補足調査にこういう意見がありましたというぐらい、もし載っけられるのだったら、記載してみてください。急に住まいが悪くなるというのは、非常に弾力性の弱い項目ではないかなという気はするのですけれども。

　最後、文化だけやってしまいましょう。文化は横ばい、それで一元配置分散分析をやるとこういったところで全体は横ばいなのだけれども、上がったり下がったりしていますと。女性が下がる。

○若菜千穂副部会長　30 代が上がっている。

○吉野英岐部会長　30 代が上がる。目覚めるという感じですか。職業、学生はどんと下がる。

○池田政策企画課主任主査　学生は少ないので、その他です。

○吉野英岐部会長　その他。専業主婦も下がるのですか、どうしてだか分からないけれども。文化の充実度を感じますかと。結構下がっている方に見えるのだけれども、よく分からないですね。全体的には横ばいなのだけれども、その他と専業主婦で下がってくると。では、その他と専業主婦向けに講座打ちますかということになりますね。

○山田佳奈委員　補足調査ですと、感じている人は割と地域のお祭り、伝統芸能とかにやっぱり……。

○吉野英岐部会長　コミットしている人。

○山田佳奈委員　高く、かなりという感じですよね。あと、感じていないという人は、「誇りを感じる歴史や文化が見当たらない」、「歴史に関心がない」という人も３割はいる。３割の人はいるので、例えばいろんなものを仕掛けてもらうとか、多世代にわたってというのはあるかもしれません。

○吉野英岐部会長　今のは 83 ページの話かな。

○山田佳奈委員　これは前回５月 21 日の資料ですね。第２回の資料５の歴史・文化というところ。

○吉野英岐部会長　それはあれですか、年代でなくて単純集計。

○山田佳奈委員　トータルです、単純集計。

○吉野英岐部会長　今回 30 から 39 歳の年代別のところで出してくれたのが 83 ページにあるのですけれども、資料３で、そこでの何で 30 代が上がったかというと、感じる人たちを見ればいいかなと。地域のお祭り、伝統芸能、過ごした年数とか活動、文化伝承活動が出ています。これも何とも言えないですね。あまり考えて分析しなくていいのであれば、ここはこうでしたしか言いようがないですね。

○若菜千穂副部会長　普通に淡々とこの方々が挙げているのは地域のお祭り、伝統芸能ですというのでいいですよね。

○吉野英岐部会長　30 代の人たち、上がっている方。下がっている方が分からないのですよね。結局ならされて横ばいになるのですけれども、職業で、学生その他の答えはここにないのですか、今日の資料には。

○池田政策企画課主任主査　すみません、ここにはないです。

○吉野英岐部会長　あって面白そうだったら使いますけれども。

○池田政策企画課主任主査　学生＋その他や専業主婦（主夫）も両方。

○吉野英岐部会長　0.38 下がって、結構下がっているような気もするのだけれども。

○池田政策企画課主任主査　これは実感が下がった人を抽出しているわけではなく、あくまでも実感が低い人の回答となっています。

○吉野英岐部会長　すればいいのだけれども、できないから学生その他の職業に当てはまる人で、補足調査の中で、感じないとか。

○池田政策企画課主任主査　単純集計の結果ということですね。

○吉野英岐部会長　ええ、この人たちの意見はこうでしたというぐらいですかね、もしそれがうまくピックアップできるのであれば。それほどすごく大事なことというよりも、むしろ最後に、実感が低下した分野が大事なので、ここをやる時間をちゃんとつくらなければいけないので、取りあえず進みたいのですが、５分ほど休憩しましょうか。

〔　休憩　〕

○吉野英岐部会長　それでは、残された時間で低下した本丸の話を少し進めていきたいと思います。

20 ページですかね、まず健康・余暇の分野の余暇の充実の実感値が低下していますと、①はこのとおりですと、低下していました。②は、分散分析やるとここが低くなりました。世帯別ではこうでした。③というのが、それを時系列で見たところ幾つかのところで変化が有意ということが分かりました、それを表にすると表 14 のようになりますと。しかし、5,000 人調査からの要因抽出は難しかったということから、表 14 に掲げられた分野において補足調査を使って要因を推測するとこのようなものになりますというのが⑤ですかね。④は、これ全体的な話ですか、補足調査全体で低下した人としての上位３つはこれですということですね。⑤は、さらにそのカテゴリー別。

○池田政策企画課主任主査　⑤は低値で推移している属性についてです。

○吉野英岐部会長　低値は載せる。低値で、さらにカテゴリーに分けてということですね。⑤と表 15 はリンクしているのですよね。

○池田政策企画課主任主査　はい、表 15 はそうです。

○吉野英岐部会長　表が先のような気がするけれども、いいのか。ここは「余暇の充実」

ですね。④から見ると「自由な時間の確保」、「趣味・娯楽活動の場所・機会」、「知人・友人との交流」が、実感が低下した要因として挙げられますと。いかがでしょう。ほとんどどれ見ても自由な時間の確保がトップですか。ですよね。どれをどう見ても。トップスリーはほとんど一緒。どこからどう切ってもこの３つの要因を掲げる人が多いということですか。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　以上ですかね。自由な時間が減ったということですかね、これ。

○池田政策企画課主任主査　逆にここの記載は、先程のお話だとこういったところで低値で推移していたけれども、理由はこれだとまとめてしまってもよろしいでしょうか。

○吉野英岐部会長　だって、同じような意見ですものね、いいのではないですか、２、３位のずれはあるけれども、上位３つの要因は全てこの３つであったというような言い方でくどくど書かなくても大丈夫ではないかと。余暇は低いのですね、うちの県はね、感じる人が。根本的にどうしていけばいいのか。仕事をしていて収入も低くて、余暇も低いのではやってられないよと。

○山田佳奈委員　有給休暇の取得率を上げるとかですかね。

○谷藤邦基委員　ワーク・ライフ・バランス。

○吉野英岐部会長　ワーク・ライフ・バランスを推進すると。

○池田政策企画課主任主査　魅力的な趣味を持っていただくということなのですかね、原動力がないとなかなかお休みも取りにくいかもしれませんけれども。

○吉野英岐部会長　でも、そもそも働かなければいけないのだからワークが大事ですと。時給を上げる、そっちは。時給を上げたり処遇をよくして、長時間労働は避ける、そんなようなことが随分出てくる、自由時間を増やして余暇を楽しんでいただくということですか。そもそも寝てばかりいてはだめですとか、でも理由がみんな同じなので、まとめてしまっていいのではないですか。

地域とのつながりも下がってしまいました。ここは 0.19 ポイント下がっており、低下したといえますと。一元配置分散分析によりますと、こういったところで下がったり上がったりしていますと。さらに、上がったり下がったりではない、高かったり低かったりしていますということですね。時系列で見ますとここに出てくる表 16 に示されているところで有意な下げが見られたと、たくさんあるけれどもね。どこを見ても下がってしまっているというのが地域社会とのつながりですね。その下げの要因は、全体で補足調査から見ると、ページ 23 の④のような３つの要因がありましたと。これは低位ではないから、ここで終わ

るのですよね、⑤がないですね。隣近所との面識・交流、これが減ったということですかね。あるいは自治会・町内会活動への参加が減った。地域の行事への参加も減ったということでもって、地域社会とのつながりが薄れつつある。確かにそのとおりなのですけれども、そのとおりどうしたらいいかと。報告書に出さないにしても、地域とのつながりを減らないようにする、つながりを実感できるように保つ、あるいはもっと感じるようにするというのは、これもまた難しいですよね、どうしたらいいですか。

○照井政策企画課総括課長　23ページの表の中でも、特に広域振興局圏別で見ていただくと沿岸広域局が特に下がっている部分もあります。例えば被災地のコミュニティというのは重要な課題だというところもありますので、そこら辺はまだまだというのが出ているのかもしれません。これは全然私の推測ですけれども。

○吉野英岐部会長　でも、これがもし一貫して下がるようなことが起こると、やっぱりそうなのかなと。

○照井政策企画課総括課長　注意して見ていかなくてはいけないと思います。

○吉野英岐部会長　コミュニティー大事だから、いろんな努力をしていただいているのだけれども、なかなかそれが実感できないような現実があるということですかね。

○山田佳奈委員　ここは多分この部会にとってもこれまでの経緯からしても重要なところの一つかなと思っているのですけれども、県民意識調査の中に、私の間違いでなければ問４に当たるかと思うのですけれども、幸福に関連する項目としてつながりに関する質問項目が入っていて、結構似た感じの項目が入っているのです。ここを使ってみてもいいのかなとは思いました。これも第１回の参考資料のところです。もし余力があれば、あるいは今後のトータルで議論するときでもよろしいのかもしれませんけれども、いずれこことリンクさせて議論してもよろしいのかなという気はしています。

○池田政策企画課主任主査　多分、第１回目の資料４の速報の中の７ページの問４のところでお示ししているかと思います。

○山田佳奈委員　今池田さんおっしゃってくださったのは資料４の速報のところですね。

○池田政策企画課主任主査　そうです。７ページのあたりの話、問４の話だったのかなと思っているのですが、これの内容についてということですか。

○山田佳奈委員　今回のレポートで、地域社会とのつながりの実感というのをこの調査ではこうでしたといったことで、つまり、今回のレポートの結果というのはこの問４の１とか問４の２とは別個の項目になっていますよね、確か。ということで、余力があればこうしたせっかく県民意識調査で近いことをやっているので、分析の一つのチョイスという意

味で、このせっかく出した、皆さんに答えていただいている問４というのをいずれ何かで分析してもいいのかなと。

○吉野英岐部会長　これの経年比較出せるのでしたか、個別の問４の１の経年比較とか問４の２の比較とか。

○池田政策企画課主任主査　こちら、括弧で前回数値ということで、昨年の数値が入っています。なので、例えば問４の１を見ますと「お互いに相談したり、日用品の貸し借りするなど生活面で協力しあっている人もいる」は 17.0％ですが、昨年が 16.5％、隣が 36.2％が昨年度は 39.5％と、ほぼほぼあまり大きな差が見られないかなという感じはしますけれども。いずれこういう割合になっているというところはあろうかと思います。

○吉野英岐部会長　あまり大きな差はないということですね。

○和川特任准教授　どちらかといえば、決定的な差が見られないので、そこまでは書き込まなかったというか、そこまで触れていなかったというのが事務方の整理と思います。

○山田佳奈委員　せっかくこちらでもあるので、県民意識調査側で行った問４の中でも同様の傾向が示されましたとか、ここだけの話ではないですよというのが少しあってもいいのかなというぐらいでしょうか、もしあえて言うとすると。別になければならないというわけではないのですが、補足的にあってもいいかなと。

○吉野英岐部会長　それでは、この前の数値を見てください。変化はないんだよね、個別の質問項目のところだけ見るとね。ただ、分野で見ると大きく変化が有意に見られるというのはなぜなのか。

沿岸広域で、先ほど総括課長さんおっしゃったようにマイナス 0.2。それは確かにほかの圏域に比べると大きいのです。でも、特別な事情というのはなかなか統計からは難しそうですね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　資料１の８ページを見ていたのですけれども、部会長が懸念しているところ、私もここだけがＲ２がこの５年間で一番低くなったので、ひっかかりました。

○吉野英岐部会長　県の合計も 0.19 下がっていると。

○ティー・キャン・ヘーン委員　いいえ、0.19 下がっているけれども、この５年間の中で一番低い。そこだけががくんと下がったので、何かあったかなと、よく分からないのだけれども、何か気になりました。

○吉野英岐部会長　下げ幅が大きいのが例えば 60 歳以上の無職の方とか、３世代とか沿

岸とかが下げ幅大きいのです。じいじゃんたちが行かなくなったとか、高齢化して。１年違うだけでそんなに急に５歳も年取るわけではないのだから、急に行かなくなったことはない、全体的なつき合いを出せるような機会が減っているとか、難しいね。地域社会とのつながりというのは何をもってしてと言われるとつらいところがあるのですけれども、ほぼ押しなべて若い人を除くとほぼ下がっている。居住年数も長いほうが下がっている。

○谷藤邦基委員　職業で見ても無職だけではなくて常用雇用者も下がっている。これといって、これが特徴的なものだと言えない感じがあるのですよね。そういう点では非常に気持ち悪いというか。

○吉野英岐部会長　どこが震源地かも分からず、全体的に低下している。岩手の取り柄であったのにというか。

○山田佳奈委員　すみません、大変しつこいようですが、先ほどの県民意識調査の問４、この御近所とのつき合いとか、ここら辺というのも年代別というので、ひょっとしたら見えてくるものがあるのかもしれない。

○吉野英岐部会長　５年とか。そこは２年しかないのだけれどもね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　これは属性別という話。

○吉野英岐部会長　年代別か。

○ティー・キャン・ヘーン委員　属性で。

○吉野英岐部会長　年齢とかクロス。

○山田佳奈委員　で見るか、どこまでやるかという話になるのですが、もし細かく見るのであれば、ですね。

○吉野英岐部会長　これもう一年やると、また下がったら、これ何かあるのでしょうねと。

○ティー・キャン・ヘーン委員　何かもうぎりぎりですよね、3.16。

○吉野英岐部会長　だから、もう下位におっこっちゃうぐらいですね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　回復することを期待すると。

○吉野英岐部会長　落ちてから有意差を測るというのは後出しになってしまうから、本来であれば早く予防措置を取った方がいいということにはなるかもしれないけれども、まだ

分からないんだよね、これ。取りあえず今記載がこういうふうに記載していただいたので、押しなべて下がっているということを今年は強くこれは言えますと。要因については、補足調査からこの３つが回答としては多かったですというところまでとどまっていて、これでいいかということですけれども、いいですか、今年は。

○谷藤邦基委員　やむを得ないと思います。

○吉野英岐部会長　分かりました。では、ここで一応とどめておきましょう。

地域の安全も同じような傾向がありまして、下がっているということと、それから令和２年の結果についてはどこが高く、どこが低いというのはあるのだけれども、次の 24 ページ、表 17 を見るように多くのところでだっと下がっています。ただし、ここは補足調査の実感が低下した人の回答から自然災害、特に沿岸の下げが大きいのは、あるいは県北も含めてですけれども、自然災害が影響したのではないかということが、これここは書かれているのですね、当初の見解ですね。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　県も全部下がっているのですよね。確かに沿岸・県北が下げ幅大きいので、沿岸・県北はそうだろうなと思うのですけれども、何で他まで下がってしまうのですかね。これ防犯・防災両方入っているんでしたっけ。

○池田政策企画課主任主査　はい。入っています。

○吉野英岐部会長　熊が出だして、全県的に。熊が怖くなって下がっているというのもあり得ますか、野生動物の、それは関係ないですか。そもそも項目に入れていないのは分かるけれども、安全を脅かす要因が沿岸ではもちろんなのだけれども、全県的に見られなくもない。とすれば、特に下げ幅が多いところは最後に説明するとして、全県的に安全の実感が下がってしまうということについてはどうしましょうね。

○池田政策企画課主任主査　個人的な印象で申し上げさせていただきます。私は去年まで廃棄物の担当にいまして、いわゆる台風災害、令和元年台風災害の関係ですけれども、大きく取り上げられているのは基本的には沿岸北部、沿岸南部もそうですけれども、内陸にも被害が出ていまして、屋根が飛んだりとか木が倒木とか、そういったものの被害もかなりございました。内陸では一関市、平泉町あたりもかなり被害を受けていますし、そういったことを考えると災害の影響、顕著に何か去年あったのかということで考えると台風というファクターがどうしても大きく効いてきているのではないのかなという認識でいます。

○谷藤邦基委員　今の池田さんの話を補足するわけではないのですが、台風で直に被害に遭わなくても、台風が接近しているというと避難準備を始めることがよくあるわけで、ハザードマップを確認してみるとか、我が家が危ないとか、避難場所はどこだったとか、そ

ういう災害を意識した行動をし始めると、それが意識の中にある程度残るということがあるのではないかと思うのです。それとの関連でいうと、あそこが果たして大丈夫かといろいろ心配になってくる。そういったことが多分全部つながっていると思うのですよ、意識の中では。だから、必ずしも直撃されなくても、近づいてきたというだけでもそういう意識には影響があったのではないかなと。

○吉野英岐部会長　全県的に下がってくると。ということは、台風が来なければ大丈夫。

○谷藤邦基委員　でもないかなと。だから、岩手県に直接来なくても来るかもしれないとか、あるいは今度また改めて地震、津波の話が出てきていますよね。だから、特に津波というのは沿岸の人たちにとっては大きな脅威ですから、そういった情報があるだけでも意識の中ではいろんな不安感とか出てくることがあると思います。

○吉野英岐部会長　そうすると不安感を取り除くきちんとした情報提供とか、例えば避難経路の確認とか……。

○谷藤邦基委員　避難経路の確認、あとはハードの整備です。

○吉野英岐部会長　そういったものを通じて不安感を低減させるような取組が引き続き必要だろうなと。

○照井政策企画課総括課長　ハード、ソフト両面で多重防災の取組を進めていくということが必要だと思います。

○山田佳奈委員　私も、印象でいくと、交通事故というのが年代によって目立っているのです。40 代ですと「感じない」という方が、人数は、絶対数が少ないからあれですけれども、全体の統計を見ても「あまり感じない・感じない」の中では自然災害の発生状況に次いで交通事故の防止というのが出ているということで、ひょっとしたら……。

○吉野英岐部会長　減りつつはあったのですけれども、交通事故ね、コロナで減ったけれども、死亡事故が増えている。全体的な交通事故の発生件数は減っているのです。

○ティー・キャン・ヘーン委員　その前の調査はコロナ関係ない。

○吉野英岐部会長　いや、コロナがなくても、以前に比べれば交通事故はかなり減ってきて、死亡する人も減ったのです。今もコロナで交通事故自体は減っているのだけれども、死亡事故者が増えてしまったという変なことになってしまったのだけれども、それは恐らくスピードをがんがん出して運転しているからだと言われていますけれども、でも交通事故というのはまだまだ……。

○照井政策企画課総括課長　特に最近は高齢者の交通事故というのが県の中でも課題になっているので、その辺に対するものかもしれません。

○吉野英岐部会長　安全、安心につながらないと。交通事故なんかも関連している可能性があります。そういう意見があったと、補足調査の中で。コメント見てください。

○池田政策企画課主任主査　今のは記載の中に入れると。

○吉野英岐部会長　基本は入れなくてもいいのかもしれないですけれども、そういう意見があったというのはどこかに残しておいてもらえると。

○池田政策企画課主任主査　議事録とかには残ります。

○吉野英岐部会長　はい。あるいは今後に当たっての、書かなくてもいいですけれども、視点。議事録だと全部文章になってしまうので、ポイントが見えなくなってしまうので、視点として別途残しておくといいですね。

仕事のやりがいなのですけれども、これも下がってしまうのですか、0.16 下がって、分散分析の結果がこうでして、時系列変化の分析ですとこの表のとおり、表 18 のとおりですが、属性分析からは要因抽出は難しいということですけれども、補足調査から収入、給料の額、職種、業務の内容、将来の収入、給与の額の見込みが上位に来ているということで、そういったことが低下の要因とつながっているのではないかということですね。やりがい……。

○ティー・キャン・ヘーン委員　広域圏全体で……。

○吉野英岐部会長　全部落ちている。やりがいがなくなってきてしまったということですかね、県で。

○谷藤邦基委員　印象どうのこうのではないのですが、年代別で 70 歳以上のところが有意に落ちているということは、仕事したくないのだけれども、せざるを得ない人たちが出てきていると。

○吉野英岐部会長　去年は。

○谷藤邦基委員　例えば年金のマクロスライドが発動されたりしているわけです。それで減ったわけではなくて、実は増えてはいるのだけれども、本来増える分が増えてなかったということがありますので、だから何かそんなことが影響しているのではないかなという気もするのですが。

○吉野英岐部会長　特に 70 代以上でがくんと落ちているのはね。

○谷藤邦基委員　あくまでも印象でしかないですけれども。

○吉野英岐部会長　働かざるを得なくなったと。

○谷藤邦基委員　そういう印象を受けます、私は。

○吉野英岐部会長　モチベーションはあまり高くない、やりがいがいま一つ実感的に感じられないと。20 年以上の居住者とか、70 歳以上というのがベテランの人で特に感じられないというか、感じ方が落ちたというか、例えば高齢化率とも近いですか、この県北振興局というのは沿岸や、あるいは県北というのは高齢化率が高いのですか。

○谷藤邦基委員　多分。

○吉野英岐部会長　県南や盛岡に比べればどうしても高齢者が感じられないような状況になっているのではないかと、それは仕事がないのではなくて、無理やり仕事をさせられているのではないかと。

○谷藤邦基委員　不本意に仕事をしていると、私にはそういう感じに見える。

○吉野英岐部会長　それはやっぱり必要な収入が感じられないというのにリンクするわけですか。

○谷藤邦基委員　と思います。

○吉野英岐部会長　なかなかこれも、とりあえず補足調査でこういう結果が出ているというところまでかな、あとは今のは議事録に残しておいて、不本意就労説というのもないわけではないと、書き切れないけれども。関連して、必要な収入・所得も、これも落ちていると。落ちているといっても 0.09 だから、26 ページの４行目、これ仕事のやりがいの実感……。

○池田政策企画課主任主査　失礼しました。

○吉野英岐部会長　これは所得でいいですよね、収入・所得で。

○池田政策企画課主任主査　はい、収入・所得です。すみません。

○吉野英岐部会長　0.09 だから、かなりぎりぎりですけれども、一応有意な差と言えるのかな。下がったところは押しなべてというよりは、0.09 だから全部ではなくて自営業種 0.23、あと沿岸、３世代の人たちの所得、収入の実感が感じられないと。補足調査からの

理由を見ますとやっぱりそれはそうだよねと。これは結果であって、原因は何かと言われたら、例えば業績不振、購買者の減少とか、要するに勤労者よりも自営業種に、あるいは臨時雇用さんとかという感じで、本雇用さんたちよりこっちが高いということは何かあるのでしょうね。

○谷藤邦基委員　早い話が収入が保証されていない人たちなんですね、基本は。だから、今コロナで大騒ぎしていますけれども、コロナがなくても去年の後半ぐらいから経済的には経済活動が鈍化していましたので。

○吉野英岐部会長　もともと。

○谷藤邦基委員　はい。恐らく沿岸は復興に絡む公共事業等の減少等も影響していると思います。自営業者も商店の店主というよりは、日雇いといったらあれだけれども、何か……。

○吉野英岐部会長　日々雇用。

○谷藤邦基委員　ええ、のような人たち、でも臨時雇用者になるのかな。

○吉野英岐部会長　臨時雇用者も悪いです。

○谷藤邦基委員　自分でどっちだと判断しているか、分からないところありますけれども、いずれそんなのが影響しているのかなという感じはあります。あとは押しなべて元々低い層。

○吉野英岐部会長　低い、低さは限りなく低いですから、どれが低いと言えないぐらい低いです。

○谷藤邦基委員　専業主婦とかのところが上がっているのは、多分パートに改めて出始めたとか、何かそんなことではないのかなと。

○吉野英岐部会長　むしろ仕事があると。

○谷藤邦基委員　ええ、仕事をし始めたと、それに伴って前になかった収入が入ってくるようになったとか、あくまでも推測でしゃべっていますけれども、そんな感じに私には見えます。

○吉野英岐部会長　復興需要の減退による公共事業そのものが落ちていると、それも確かにそのとおりですね。それが実感として出てくるかどうか。

○山田佳奈委員　気になっているのが、30 代が低位で推移しているといいますか、変化の中では出てこないのですけれども。

○吉野英岐部会長　元々低いのですかね、ずっと低いのかな、30 代は。

○山田佳奈委員　27 ページのところの表 20 で見ますと、30 から 39 歳が。

○吉野英岐部会長　1 回上がったけれども、下がったのか。

○山田佳奈委員　2.36 というのは……。

○吉野英岐部会長　2.36 というのは、全部見ても一番低いぐらい。

○山田佳奈委員　じゃないでしょうか、今年は。ほかの年は相対的には低いかな、そこだけ見ればですけれども。

○吉野英岐部会長　30 代で実感度が低い。

○山田佳奈委員　と言うことができるということですかね。

○谷藤邦基委員　結局実際の収入額ではなくて、自分が必要と思う収入が得られているかどうかという観点なので、要は入と出両方から来る実感だと思うのです。

○吉野英岐部会長　金は必要なのだけれども……。

○谷藤邦基委員　そうです、この年代が子育てであったり、あるいは家建ててローン借りたりとか一番お金が必要な年代であるにも関わらず、給料の伸びはさほどでもない。となると、実感としては低くなるということなのではないかなと。

○吉野英岐部会長　年が上がっていくと実感がよくなっていますね。

○谷藤邦基委員　給料が上がっていく一方で、出ていく方が、恐らく子育てが終わるとか、ローンを払い終わるとかいろいろ出てくるとは思いますけれども。70 歳以上の人たちは、本来はある程度年金で、ベースで保障されている部分があるし、お孫さんにお金を使うケースはあるかもしれないけれども、子供に使うことはまずないでしょうから、それやこれやを考えていくと年齢が上がると少し数値は改善すると。ただ、それでも 3 いかないというあたり、やっぱりみんな不足感はずっと持っているということですよね。

○吉野英岐部会長　仕事が無いというよりも、仕事の報酬が低いということですよね。

○谷藤邦基委員　そういう感覚だと思います。もちろん無いという人もいるかもしれませんけれども、ただ選ばなければ意外と仕事はあるのですよ。ただ、選ばなければということの裏の意味は、安い賃金を受け入れればということなのですよね、あるいは労働条件が悪いとか。

○吉野英岐部会長　それが改善しない。今度もっと悪くなってしまうという感じになると。

○谷藤邦基委員　ありますね、それは。特に飲食店などの今のコロナ禍の中で仕事ができない方々。

○吉野英岐部会長　自営業者は軒並みダウンの可能性がね。でも、30 代は金が必要な世代なのだけれども、それに見合う所得が恐らく十分に獲得できていない。20 代より低くなってしまうのですものね、給料自体は上がっているはずですよね、20 代に比べて。

○谷藤邦基委員　通常は上がっているはず。

○吉野英岐部会長　しかし、実感度が下がっている、常に 20 代よりも低いと。

○谷藤邦基委員　出る方も増えるわけですよね。

○吉野英岐部会長　はい。30 代は子育てでもつらいし、所得もぎりぎりだし。

○照井政策企画課総括課長　我が身を振り返っても同じ。

○吉野英岐部会長　そこを抜ければ何とか楽になると。

○照井政策企画課総括課長　確かに 30 代は大変かもしれませんね。

○山田佳奈委員　かといって、「ではどうしようか」ということになれば、難しいのですけれども。

○谷藤邦基委員　だから、そこは逆に所得の補填はできないけれども、子育ての支援とか何かそういう方向の支援は……。

○吉野英岐部会長　出費を減らすとか。

○照井政策企画課総括課長　若者世代の経済的支援というのは少し考えなければいけないと思っています。子育てにするか何かはありますけれども、今は社会保障というと高齢者が主な対象というイメージがあるのですけれども、実は若者世代の社会保障的なものも少し考えないと人口も増えていかないし、自然増にもつながっていかないというところが

あるのではないかという話は分析する必要があるのではないかなと思っています。まさにこういうところでもしかするとつながってきているかもしれません。

○吉野英岐部会長　３になってもらいたい、何とか。私が言うことではないですけれども、一定程度感じるぐらいまでいかないと、岩手県に人が来なくなってしまいますよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員　若者が出ていきますよ。

○吉野英岐部会長　出ていきますか。せっかく移住者を増やそうとか、こっちで仕事をするといいですよと、知事も首都機能分散で絶対こっちがいいですよと、現実はこうですよと言ってしまうと、感じられる実感として、物すごく金持ちになるということはないけれども、一定程度の実感が得られるような、もちろん収入額も増やさなければいけないけれども、収入額だけで、片側政策だとあれだから、いわゆる社会保障というか、若者世代あるいは勤労者世代、子育て世代とかに対する幅広い社会保障をどうしていくか、県でできるのは限界があるかもしれませんけれども、何か打ち出さないとこれ全然改善しないかもしれない。

○山田佳奈委員　自分の将来の年金がどうなるかとか、20 代、30 代はそうしたことも考えているところだと思うのです。絶対値はなかなか出にくいかもしれないけれども、いかに安心して暮らせるかという、それで実感のところが反映されればいいなと思います。

○吉野英岐部会長　ここ子供が増えてもね、実感下がらないというのが面白いですね。子供が３人とか４人以上で、ほかに比べればやや実感値高いのです。子供がいた方が金かかって大変だとあまり思わないのですね。思っても、それは子供がいる方がむしろ楽しいからいいやと、よく分からないけれども。少なくとも金かかるのははっきりしているはずで、教育経費あるいはその他、それ見ても子供の多い人たちは実感値が高いということなのですよね。

谷藤委員、解釈はありますでしょうか。

○谷藤邦基委員　子供の年齢が分からないので、はっきり言えないのですが、ただこの辺だと高校によりけりですけれども、高校生はアルバイトをやっていたりするケースがあるので、そうすると家計補助的なこともあるのではないでしょうか。

○吉野英岐部会長　子供がいるからといって、必ずしも金かかるわけではないと。

○谷藤邦基委員　だから、これ扶養している子供とは書いていないですよね。

○吉野英岐部会長　なるほど、分かりました。いずれにしても全体的に低いのは何とかしなければいけないですね。これについては、要因は難しいので、ここは今書いてあるとおりの補足調査で上位に上がっている項目は書きますけれども、さらに深い要因分析は今回

は書き切れないということでよろしいですかね。自由な議論の中でいろいろ出ますけれども。

自然の豊かさについても低下していると、これも 0.05 だから若干低下している、有意だけれども。変化で低下しているところは、こういったカテゴリーでしていると。

あとは属性別に、ここは高値ですね、押しなべて高い。表の 22 はもう４点連発していますので、どこを見ても４点あるというのはこの項目くらいしかない。

○池田政策企画課主任主査　これだけです。

○吉野英岐部会長　誰にでも自然は豊かですよと。ただ、全体的に若干低下ということで、それを感じている人は学生その他とか、沿岸で少し。一応回答例から推察すると補足調査で実感が低下している人は、緑の量、公園、緑地、水辺、自然に関心がない。高値というか、高い値で推移しているのがむしろ豊かできれいで水もいい、空気もきれい。

これ低下の要因はよく分からないですね。自然災害があまりにもあり過ぎて、倒木の山になっていて、山がみっともない姿になっているとまでは言えないですね。全体的に 4.3 とか、4.46 とか異常に高い。4.46 といったら５と４しかない。そうですよね。非常にたくさんが実感していると。けれども、若干下がったぐらいです。あまり突っ込んでもしようがない。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、ここに高値を載せさせていただいたのは、ここで一応ほとんどが高いという整理をしていただいているのですが、高い部分も一応整理しておかないと政策への反映ということを考えたときには必要かなと思っていたのが１点と、あと評価のときに実感が非常に高いので、仮にここの有意差があったとしても評価を避けていいかどうか非常に悩ましい部分がある分野だと思っています。そこのところで政策評価専門委員会にもお諮りしたいのですが、ここの分野のように４点を超えているようなものについては実感が多少下がったとしても、評価を下げない方法でよいかなとは思っていました。

○吉野英岐部会長　４切らなければいいですよとか。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　これさらによくするというのは相当な大努力になってしまいますよね、4.6 を 4.8 にしてくれと、どういう政策を打てばそこまで限りなく上がるのか、もう限界が近づいているので、あと下がるしかないみたいなところ、そういうふうなところでモチベーションを高くしてずっと頑張ってくださいというのは確かに難しいですね。多少下がっても４切っていなかったら、それは高値でいいですね。

○池田政策企画課主任主査　そうですね、ほかのとも違う性質があるのですが、ここの維持、守っていくという、次の世代につなげていくということの分野ですので、こういった

考え方が適用されてもあり得るのかなと考えています。

○吉野英岐部会長　それは評価のところでまた議論していくということで、今まとめてもらったのは下がった分野についても事実関係を出した上で、推測される要因については補足調査から上位３つの意見を引っ張ってくるということを中心にやってみましたと。いろいろ委員会の中で御意見いただきましたけれども、まだ確証とまではいかないので、レポートに載せるまでには至らないけれども、来年また議論しなければいけないので、備忘録のように、議事録でいいのだけれども、ポイントだけすぐ分かるような形でも資料としてつくるといいかなと思いました。

　あとはまとめなので、これはこれまで書いてあることをまとめたということでいいですか。

○池田政策企画課主任主査　基本的には単年の一元配置分散分析のところを除いた形で整理をしています。いわゆる今回の分野別実感の変動に係るようなところという形で整理をさせていただいています。

○吉野英岐部会長　では、これであと参考資料はこのとおりですね。今日は６月 19 日ですので、今後の方向性、もう７月 31 日にやったことになっている。

○池田政策企画課主任主査　いいえ、予定として入れているだけです。

○吉野英岐部会長　これ調整中でしたか。

○池田政策企画課主任主査　そうです。昨日メールをお流しさせていただいておりましたように日程調整を。

○吉野英岐部会長　予定としては今後もう一回７月末か８月でしたっけ。

○池田政策企画課主任主査　頭ぐらいまでに……。

○吉野英岐部会長　に開いて、そこで最後の確定版。

○池田政策企画課主任主査　レポート案としての確定でして、評価部分のところは概ねそこで固めていただきたいと思っています。それ以外の体裁のところまでは 10 月のときに最後の部会を開催いたしますので。

○吉野英岐部会長　ぎりぎりあと２回あるのですね。

○池田政策企画課主任主査　はい。そこで来年度、次の年度に向けてという部分も含めてお伺いさせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長　では、今日頂いた意見については、取り入れられるものについては入れていただいて、構成を少し読みやすくというか、していただいて、7月31日の前までには、次回の前までにはその案を委員に提示していただくと。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　というような形で、大分全体像がまとまってきたのですけれども、このレポートづくりのための作業と、もう一つは分析をどうしていくかというのが残っているということですか、さらに。レポートづくりの作業は多分終わりますよね、もうすぐね。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　そうすると、それ以外の仕事としては、タスクとしてはこの委員会では。

○池田政策企画課主任主査　まずは来年度に向けて、例えば補足調査とか、そういったような内容のところで、先ほどもお話を頂戴していますけれども、見直しする部分があるかないか。

○吉野英岐部会長　調査票の見直し。

○池田政策企画課主任主査　ええ、そういったようなところを今のところ考えてございます。その他も整理した上で、改めて御提示はさせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長　若菜さんからワークショップのお話を事務局でちらっと……。

○若菜千穂副部会長　全然進んでいないので。ワークショップを開けないです。

○池田政策企画課主任主査　今年ここでやるかどうかということもあるのですけれども、ワークショップの部分も本部会にお諮りをさせていただきたいと思っていまして、その辺のどういう位置づけとか、それを踏まえてどういうふうにやっていくのかというあたりのところを整理してお諮りを今後してまいりたいと思ってございます。

○吉野英岐部会長　わかりました。では、それは今後の課題でやりましょう。
　時間になってしまったけれども、何か御意見があれば。

○若菜千穂副部会長　いいですか、１つ。物すごく根本的な話なのですけれども、幸福度の変化で上がった下がったの議論していましたけれども、それって正直施策の満足度とか重要度で見たほうがぱんと分かる部分もあるのではないかなと。

そもそも幸福度をやってきたのは、生活満足度をいくら上げても幸福につながらないよねというところで幸福指標をつくっていて、一つは生活満足度のトレンドと幸福度のトレンドを並べてみた方がいいのかなと。私は、だから生活満足度をあくまでも幸福度というのはもやもやとしているところをどう捉えるかという議論だと思うのです。なので、幸福度が上がったから、ではその詳細は何だろうかという分析というのはそもそもすごく難しくて、この議論大丈夫かなみたいな感じがしていて、次回今後のというところのもやもやの部分でいいのですけれども、生活満足度では捉えられない部分をこの幸福度で捉えられるのかどうかという、そこの注目をし続けていないと、生活満足度を幸福度という言葉で変えただけの議論をしているように見えるのです。でも、それってもやもやとしたところを捉えようとしていた指標だから、そこを突き詰めて正体を暴くというのは多分そもそもそういうものではなかったのではないかという感じがしていて、なのでこの方向はもちろんこの方向でいいのですけれども、もう根本的な研究、議論も続けていったほうがいいのではないかなと。そうでないと、これ普通に施策の満足度、生活満足度で聞いたほうが多分すっと出ますよ、と思ってしまっているわけです。

○池田政策企画課主任主査　生活満足度……。

○若菜千穂副部会長　これ調査票を見ても施策の満足度取っていますよね、補足調査で。

○池田政策企画課主任主査　はい。

○若菜千穂副部会長　そうだよね。その結果を見せてもらったほうがもっとはっきりわかるんじゃないのみたいな項目も今あったかなと思っていて、１つは調査の前段の部分と並行して、関連して見ていったほうがいい部分もあるので、幸福度だけ切り分けて、それ突き詰めていますけれども、この指標の出し方というのは物すごく難しくて、これ毎年やるのだろうかみたいな感じもあるので、どういうふうに指標を使っていくかという根本議論も続けてほしいなという感想です。次回それもやるということであれば。レポートはレポートでそれでいいのですけれども、こういう根本研究もどこかで議論を続けていかないと、せっかく作った資料が尻すぼみになってしまうかなということでした。感想です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。それは宿題で取っておいて、この幸福度指標の独自性というか有効性、あるいは新規性というか、これだからこそ捉えられるものは一体何なのかということと、既に既存の指標があるわけだから、既存の指標で見るべきものを見て、幸福度指標で見るべきものは何なのかと。

○若菜千穂副部会長　幸福で全て見ようとしなくていいと思うのです、施策全部をそもそも。

○吉野英岐部会長　評価自体は二本立てなので、基本的には達成度を見ているから、達成度に対して、最後本当にそれでいいのかという味つけで使う感じなのですけれども。

○若菜千穂副部会長　それであれば、その議論もうちら見ていないと、これだけで見ようとしているのはつらいなという感じがあったなと。

○池田政策企画課主任主査　ここで研究いただいた内容に基づいて、幸福をベースとした計画になっているので、我々とすればそこを外して評価をするのもなかなか苦しいということで、今いろいろ御意見頂戴しているという形にはなっています。

○若菜千穂副部会長　指標をつくったところまで戻ってもらいたい、議論として。

○和川特任准教授　詳細な議論は、まず後ほどとなるのですが、今回幸福を設定したのは、生活満足度が目指していたのものを幸福に入れ替えたという整理ではないと思います。ＧＤＰとか、そういった今までの経済的な指標で我々は政策を図ってきたのだけれども、それではないよねと、だからやはりもう少しレジームを変えようねということで、幸福という概念を新たに打ち出したというのが考え方かと思います。

もう一つ、では幸福度を上げるということをいきなりそこで議論するのは難しいよね、だからその幸福というのはどういう要素でできているのだろうかということで、当時は12 領域というものがあったのですけれども、12 の領域で構成をされているのだし、だから12 の領域の実感を上げるということで間接的に幸福度が上がるのだろうというロジックで 12 の領域をどうやれば上がるのかということで政策を、総合計画をつくり、そして評価も幸福を上げるという評価ではなくて、12 の領域別実感の上がり下がりで評価をしていこうよということになっていたと思います。

我々の議論は最終的には幸福度を上げようという議論ではあるのですけれども、小さな議論でいえば幸福度が上がるであろう 12 領域をどうやれば上がるのかというところを今議論しているという整理と思います。

○照井政策企画課総括課長　経緯は、今和川さんが言ったとおりで、そのとおりなのですが、恐らく取組自体が初めてのチャレンジではありますので、いろいろ今年まずやってみて、また改良すべきところがあれば、そこはまた随時次の段階でどのようにしていくかという議論を重ねていく必要はあるのかなというのは承りましたので、まずは一回数値は実績としてまた別でやって、政策評価委員会でまた議論をさせていただきますが、幸福の実感という部分のここの部会でのいろいろ深めていただいたことを一回全体としてまとめて、それをもう一回また総括して、来年どうしていくかというふうに反映させていただければと。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。最近京都大学の内田由紀子先生が新著を書かれて、その中に幸福と政策という問題も書かれていますし、残念ながら今日欠席されてはいますけれども、アドバイザーの広井先生もローカルの政策に幸福をどう活かすかという議論もなされていますが、ここにパンフレットにも載っていたり、そういった外部の有識者といったらあれですけれども、そういった幸福について考えていらっしゃる方々の御

意見もいろいろ加味しながら６人ぐらいでやっていると煮詰まってしまうので、幅広く幸福をどういうふうに生かしていくかということも継続的な議論の中で御紹介したり、議論したりもしていくこともやりたいと思っておりますので、その中からいい答えを出していければなと思っております。

とりあえずは、まず評価レポートではなくて、年次報告書をつくるということで、先に優先してやりましたので、あと２回はそれを必ずやりたいと思いますので、御協力お願いいたします。

それでは、一旦事務局にお返しします。

○北島政策企画課評価課長　長時間にわたって御議論いただきまして、ありがとうございました。

（２）その他

○北島政策企画課評価課長　次回の部会は７月後半、または８月上旬で今調整をしてございますので、決まり次第御連絡をいたします。

３　閉　会

○北島政策企画課評価課長　それでは、以上をもちまして本日の部会を終了いたします。ありがとうございました。